

立上最も緊要の事に屬す。海軍自身には相當の設備あるべしと雖も周圍をして同じく發達せしむるにあらざれば海軍國たるの實を擧げ難し。我國に於て保護政策とも云ひ得べきものは昨年施定せる船舶輸入税位にして極て姑息の嫌ひあれば、政府は此際造船及其材料に關する私立會社の發展を獎勵し公私相俟て軍國の急に應ずる爲め國家政策として斷乎たる處置に出づるを要す。彼の獨逸及米國が當年取りたる方法を選拔し或は造船材料に對する輸入税を全免するか其他當業者に特種の便宜保護政策を敢行する等適宜の方法を講じ大局に對し違算なきを期するの要ある可し。

一軍艦兵器は總て消耗品なり是に對し適當なる補充の途を講ぜざんば假令再興を遂ぐるも未だ以て海軍の基礎定めりと云ふべからず。列強海軍の多くは艦隊編制法の下に法律を以て製艦計畫を定め殊に獨逸の如きは海軍の浮動財産即ち艦艇船舶等を評價し之に對し毎年六分を經常歳入より填補として繰入るゝの制ありと。然るに我國にては僅かに彼の三基金の一たる艦艇補足費に依る小額あるに過ぎざれば海軍再興と同時に基本財源を制定すべし。蓋し海軍は一時

的のものにあらざるを以てなり。

其他將校相互間に於ける言論の拘束は陸軍に比し海軍は層一層嚴確なるものあり殆ど偶像視せられつゝあり事餘り極端に失するを以て學術上及常識上の發達を害する嫌ひあり尙ほ小問題に就ては枚舉に遑あらざれば機に觸れて論ずることあらん

第四節 結論

國防は固と一定不變のものにあらず。時勢の要求に應じて變化あるは免れざる所とす。然るに今や周圍の狀況前述の如くにして帝國の前途頗る多望なりとせば吾人は是に處するの責任又重大なるを覺ゆ。我先祖が數百年來唱導せる鷄林八道は既に併合され滿洲の一部も亦た我勢力圏内に入り歴史的國家の意思は既に其の半は達せられたる者と云べし。されば今に於て我子孫の活動すべき前途の計を講ずるは現代吾人の責任ならずんばあらず。意思なき人は屍なり。意思なき國家は亡びざるを得ず。子孫に如何なる意思を傳ふべきかは是深く考慮すべき問題にして今

一步を誤れば前途千歩の誤りとならん然るに天運循環の理に依て地球に覇たるの好機運は將に我日本帝國の頭上に襲來せんとすることは前述の事實に徴するも將亦史學家の云へるが如く東西兩半球の帝國は交互的に興隆し又衰退する者なりとの原理に依るも最早疑を挾さむの餘地なからん果哉西半球に位せる英國は國運凋落の徴を呈し我に向て切に交代を迫りつゝあるの觀ありいてや吾人は睡眠を拂ふて大帝國民の氣象を養ひ舉國一致活動の準備を整へずんばあるべからず東半球に在て千古不易の聖謨の下に世界人類を同化せしむるもの獨り我日本帝國の天職なり思ふて爰に至れば陸軍も擴張すべく海軍も擴張すべし併しながら財源には限りあり又事に緩急あれば深く攻究して適當の措置に出でざるべからず彼の陸軍縮少論の如き或は戰略戰術上の見地より得たる公算なるかは知らざれども國家經綸の上より云へば國運の發展に伴ふものとは認め難し蓋し小國は大國に比し國力以上に兵力を有せざれば國威を列強の間に維持し難ければなり事あるの日陸には四十個師團の強兵と在郷三百萬の貔貅立處に亞細亞の中原に出動し得べく又海に五十萬の艦艦あり舳艫相啣て咄嗟に太平洋上敵艦

を驅逐し得べく即ち戦へば必ず勝の自信ありてこそ國威を國際上に放ち平和を保障し得るにあらずや國民の海外發展に就ても亦然り海軍の後援否率先なくんば人意を強くするに由なく否な必勝を期するの途にあらず國運發展の機運は靈妙ある人爲に俟つて始めて始めて其効果を偉大ならしむ吾人門を出れば自動車に代るに船舶を以てせざれば一步も進む能はざる島帝國に在り豈海運の設備を等閑視して可ならんや故に云はんとす周圍の状況にして變化なくんば姑く陸軍を現在の師團數に止め寧ろ兵其もの強堅と兵器の精銳を圖るを以て唯一の主眼とし其期間に於て速に海軍の充實即ち現在の隻數四十九年までに竣工のものを含む艦十六隻裝甲巡洋艦十七隻の範圍に於て其老朽用を爲さざる舊型艦に代るに戰力優秀なる新艦を以て填補するの急務なるを確信す幸に陸軍は戦後大擴張を敢行し日夜駁駁として兵力は増加しつゝあるに反し軍艦兵器は性質上時々刻々戰力減耗し衰れ主力として頼むべき一隊をも存在せざるを見る海軍の危機否な國家の危機と云はずんばあらず此慘狀を聞かば誰か寒心せざるものあらん吾人は衷心より利害を同ふする同胞に告げ且つ爲政者に訴ふ希は閣員は各省割

據の偏見を棄て須く大局に着眼して國防上且つ國運發展上海軍再興を斷行し時勢の要求に應ぜんことを。

帝國海軍の危機終

盛田曉君は多年の友人なり、其の海軍通として知られたるも十年の久しき以前より、君にして帝國海軍の將來を患へ、此著を成すもの一點射利の念より出づるものにあらず、予は實に君の精神に感激する者、而かも海軍の事に於ては予や全く門外漢たり、豈に君の著述を品評するの資格ある者ならんや、唯國運の發展は海軍の發展に待つの一事は予の堅く信ずる所、豈に曉々の論辯を費すを用ひん、軍艦生駒に便乗航行中、友人に寄せたる書翰を示すべきか。

志賀重昂

君には試みに軍艦生駒が今回の航行を書くものと思ひ召れよ、恐くは二條の煙突より黒煙を吐きつ遙けき大海原を奔せ行く一個巡洋艦を寫さるゝに過ぎざるべし、然りながら此の如き單純なる意味にあらず、實は日本の大八洲より一小洲を割き取り來りて、太平洋、印度洋、大西洋に浮ばせたるやの觀がある、即ち艦内にて聞く所は日本語のみである、用ふる所は日本文字のみである、郵便は日本流の封筒に日本文字のみにて認め、酒保にて日本郵券を購ひ貼付して投函すれば、即ち日本に配達され得べく、無線電信は日々各方面より到來し、當日の夕刊新聞紙に發表せらるゝを以て、日本の出來事は手に取る如くに判り、又た初夜巡檢後は日本服にて起居するを許可せらるゝを以て、便乗者の甲君は酒保物價表を見て、鮎のウルカを命じ、櫻正宗を酌みつゝ、洋上の長鯨を掣するが如き大氣焔を吐き、一同謹聽し、さて飢を告ぐる頃となれば、ボーイは鮭、蕎麥汁粉、將た彼岸には春の御中日なりとて萩の餅まで供し來る、此の如き次第なれば、日本に於て家居すると何等の相違もない、凡そアングロ、サクソン民族が今の世界に雄飛するは、地球何處に到るも英語を通じ、英文を通じ、且つパツス、エール(三鱗麥酒)を得べから

ざる土地なく、四海皆な家なりと觀じ居れるに是れ因るものなりとは豫てより聞いて居る、吾々日本人も何時かは此の如き國運に際會し得べきやと遺憾千萬に思つて居つた、然るに今回軍艦生駒が日本の社會其儘を提げて地球の隨處に出入する實際を見開し、噸に平生の遺憾を慰めた、尙ほ又た海上隨處の知識を得んと欲すれば、海洋學專攻の下斗米學士、秀三、札幌農科大學助教授が海水の色、比重、溫度に關し、目前の事實に徴して一々垂教せらるゝあり、吾々が亞爾然、丁將たカナリア諸島にて用語に不便なからしめん爲めには、西班牙語專攻の濱口外務書記生、光雄が西語の科程を開講せらるゝあり、又た海圖室に入れば、本艦の寄航すべき各地の詳細圖は直ちに閱覽し得べく、書庫には南米各國の報告、年鑑、歴史、將た統一亞米利加、羅甸亞米利加、モンロー教令に關する近刊書籍を備へ付け、西班牙語は固より、葡萄牙語、伯刺西爾及びツエルデ諸島の通語、伊太利語(ナポリにての用語)と英語との會話篇に至るまで、何れも整頓して居る、更に又た吾々便乗者には、打ち寛ぎたる獨立の一室を各自に供せられ、室内には枕電燈より煽風器の末に至るまで完備し、各室に水兵及びボーイを附し、入浴は毎夕、種痘は希望に

任せ、待遇上盡さざる所なく、海軍大臣よりの慰問電信無線に對し、御懇電を感謝す。本艦の優遇に依り益々元氣なり、便乗者一同と零丁洋上より返電したる一事にても、便乗者全體の満足は想像せらるべし。

尙ほ又た零丁洋上にて想ひ出せば、此の洋上は、文天祥が宋室を恢復せんとし節に仗りて來往せし方面にして、其の惶恐灘邊說惶恐、零丁洋裏嘆零丁、人生自古誰無死、留取丹心照汗青と賦せし事など追懷し、依て夕刊新聞紙に、明二十日夕は零丁洋を航過可致候に付、文天祥の招魂を兼ね粗酒一盞差上度候間、午後五時艦長公室に御來會被下度候云々と廣告すれば、下斗米學士には天祥の書せし、廉忠孝節の四大字を携へて來會せられ、又た潮州洋を航過し、韓文公の「驅鰐文」を想起すれば、潮州に於ける韓子廟の寫真を示さるゝなど、境に觸れ景に接する毎に輒ち詩懷を動かさるゝものとは無いばかりである。

帝子荏魂違若何、回頭闕越點青螺、平生聞誦文山集、醉酒零丁洋裏過。

以上の如く、軍艦生駒今回の航行は、實に國運隆昌の縮圖と云ふべく、而して此の縮圖中の人々は、國運の隆昌より由來せし無形上と有形上との便宜快樂を併せ

有する次第なれば、凡そ日本人として此れ以上の贅澤は盡す能はず、縮圖中の人となりし吾々こそ日本隨一の果報者なる哉と、流石に天眼代議士も國家の洪恩肝に銘せり、誠に奇蹟の如しと叫んだ。更に又た沈思默考すれば、日本にて建造せし一萬數千噸の大軍艦を以て、東北南北の四半球三萬餘哩を航行する次第なれば、獨り日本の大八洲より一小洲を割き來り、太平洋、印度洋、大西洋に浮ばしめたるに止らず、實は日本帝國を太平洋より印度洋、大西洋まで三萬餘哩丈ヶ延長したると同じく、國家の威信を事實的に世界に宣揚する一點に至ては、日本海海戰の大勝利よりも一層の意味ある様に思はれる。何となれば海戰の勝利には偶然の機會なるものも多少手傳ひ居れども、軍艦の建造及び其の運轉には一點の偶然なるものを容さず、絶對的の實力を以て一萬數千噸の大軍艦を建造し、又た同じく絶對的の實力を以て三萬餘哩の航路を來往する次第なれば、予は今回の生駒航行を以て三千年來の一大史料なりと感悟し、新嘉坡に安着するや、取り敢へず感悟の儘を書き送る。

附

錄

予嘗聞之於先君子曰
夫治國之道必先正其身
身正則令行國治
國治則民安民安則
財賦自足財賦自足
則國用裕矣夫治國
之道猶若治身之有
本末也本末既立
則綱領自見綱領自
見則條目自列矣
夫治國之道必先正其身
身正則令行國治
國治則民安民安則
財賦自足財賦自足
則國用裕矣夫治國
之道猶若治身之有
本末也本末既立
則綱領自見綱領自
見則條目自列矣
夫治國之道必先正其身
身正則令行國治
國治則民安民安則
財賦自足財賦自足
則國用裕矣夫治國
之道猶若治身之有
本末也本末既立
則綱領自見綱領自
見則條目自列矣

帝國海軍勢力 (明治四十五年五月調査)

既成軍艦

戰艦		巡洋艦		洋艦	
艦名	噸數	艦名	噸數	艦名	噸數
富士	一二、六四九	浪速	九、八八五	秋津洲	三、一七二
敷島	一四、五八〇	高千穂	九、八八五	千代田	二、四三九
朝日	一四、七六五	雲霧	九、七三五	須磨	二、七〇〇
三笠	一五、三六二	吾妻	九、二四六	明石	二、八〇〇
相模	一二、六七四	雲出	九、八二六	新高	三、四二〇
肥前	一二、七〇〇	手雲	九、八二六	對馬	三、四二〇
防衛	一二、六七四	日進	七、七〇〇	音羽	三、〇〇〇
石見	一三、五一六	春日	七、七〇〇	津輕	六、六三〇

計 一 隻	約三〇、〇〇〇	戰艦	艦名	噸數	竣工豫定期	龍骨据附
		第三號	約三〇、〇〇〇	四十八年度內	四十五年三月起工	
		約三〇、〇〇〇				

未成軍艦

計七隻	松江	沖島	見島	壹岐	武藏
二五、七三六	二、五五〇	四、一二六	四、九六〇	九、五九四	一、五〇二
計四隻				鳥羽	伏見
一、一七六			二五〇	一八〇	
計六隻		最上	淀谷	鈴谷	滿州
一一、六四三	一、三五〇	一、二五〇	三、〇〇〇	三、九一六	
計二隻					
一四、六二〇					

計一五隻	攝津	河內	安藝	薩摩	首取	鹿島	丹後
二四一、九八〇	二〇、八〇〇	二〇、八〇〇	一九、八〇〇	一九、三五〇	一五、九五〇	一六、四〇〇	一〇、九〇六
計一三隻			鞍馬	伊吹	生駒	筑波	阿蘇
一三八、四八三			一四、六〇〇	一四、六〇〇	一三、七五〇	一三、七五〇	七、八〇〇
計一〇隻						筑摩	利根
四八、六四九						四、九五〇	四、一〇〇
計七隻							
二〇、九五一							

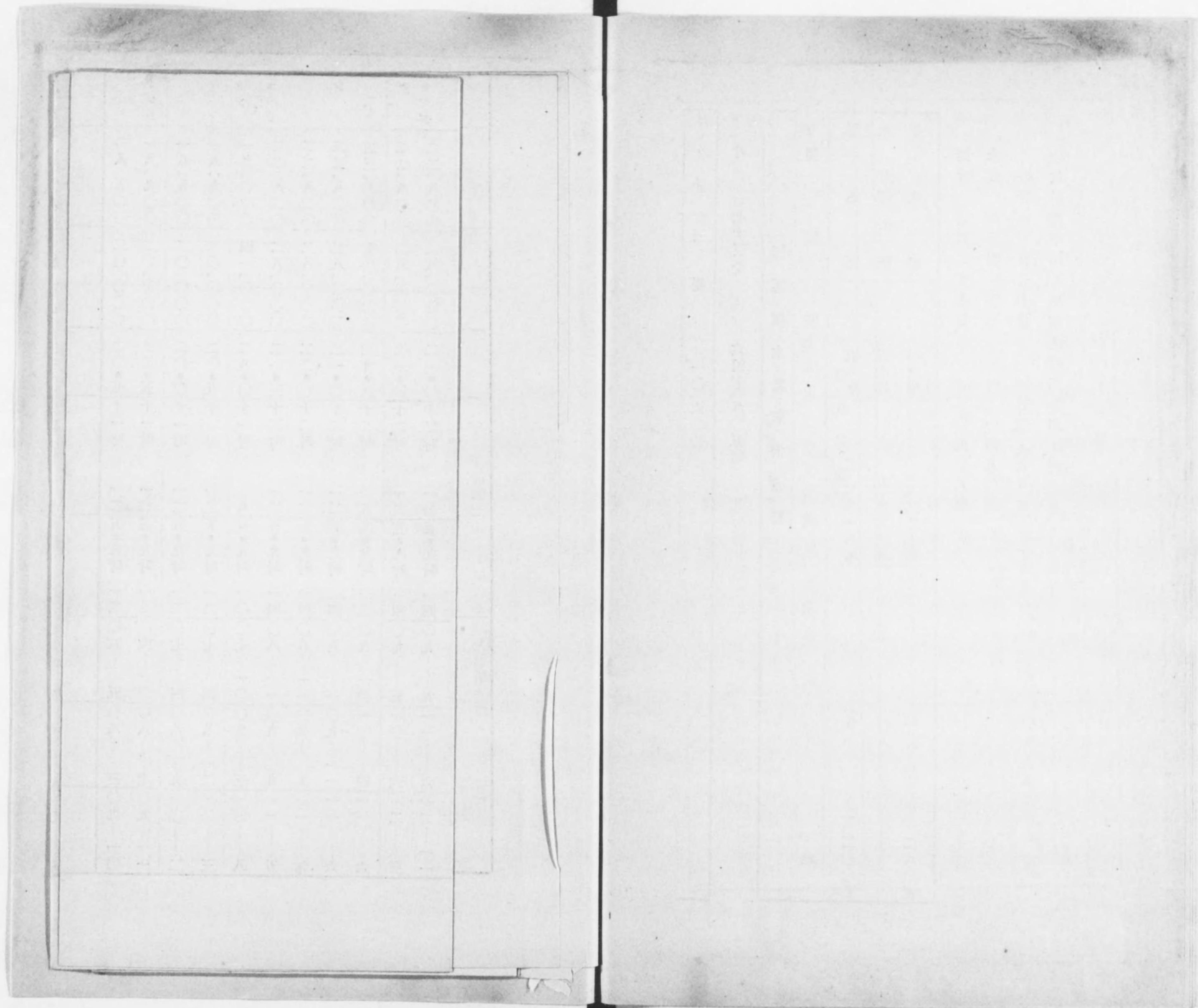
一等巡洋艦		二等巡洋艦及砲艦	
艦名	噸數	竣工豫定期	龍骨据附
金剛	二七、五〇〇	四十六年七月	四十四年十一月十七日
比叡	二七、五〇〇	四十七年度	四十四年十一月四日
榛島	二七、五〇〇	四十九年度	未起工
霧島	二七、五〇〇	四十九年度	未起工
計	一一〇、〇〇〇		
			四十五年五月十八日

二等巡洋艦及砲艦		龍骨据附		進水	
艦名	噸數	竣工豫定期	龍骨据附	進水	
矢矧(二巡)	四、九五〇	四十六年度	四十三年六月廿日	四十四年十月三日	
平戸(二巡)	四、九五〇	四十六年度	四十三年八月十日	四十四年六月二十九日	
砲艦一隻	七〇〇	四十五年度	未起工		

計 三隻 一〇、六〇〇

驅逐艦		水雷艇		潜水艇	
種類	既成	未成	種類	既成	未成
驅逐艇	五八隻		水雷艇	二二、八一八噸	二隻
水雷艇	五七隻		潜水艇	五、八六三噸	一
潜水艇	一二隻			二、二二七噸	
					二八〇噸

既成 百二十七隻 三〇、九〇八噸
 未成 三隻 一、四八〇噸
 合計 百三十隻 三二、三八八噸
 他に計畫中のもの驅逐艦二隻潜水艇二隻



列國弩級軍艦一覽表

(明治四十五年五月某所測)

(C印ハ主戰巡洋艦ヲ示ス) (其一)

獨				國												英												艦名	排水量	實馬力	速力	備註	他補助砲	建造年	竣工月																																																							
畫計年〇一同	畫計年九〇同	畫計年八〇九一	計七同畫年〇	畫計年二一同	畫計年一一同	畫計年〇一同	畫計年九〇同	畫計年八〇同	畫計年七〇同	畫計年六〇同	畫計年五〇同	畫計年四〇同	畫計年三〇同	畫計年二〇同	畫計年一〇同	畫計年〇一同	畫計年九〇同	畫計年八〇同	畫計年七〇同	畫計年六〇同	畫計年五〇同	畫計年四〇同	畫計年三〇同	畫計年二〇同	畫計年一〇同	畫計年〇一同																																																																
一〇 オルデンブルグ	一一 アフリカドリスヒ、デ	一二 カイザ	一三 ゲトベン	一四 カイゼリン	一五 エーデル代艦	一六 オデイン代艦	一七 ...	一八 ...	一九 ...	二〇 ...	二一 ...	二二 ...	二三 ...	二四 ...	二五 ...	二六 ...	二七 ...	二八 ...	二九 ...	三〇 ...	三一 ...	三二 ...	三三 ...	三四 ...	三五 ...	三六 ...	三七 ...	三八 ...	三九 ...	四〇 ...	四一 ...	四二 ...	四三 ...	四四 ...	四五 ...	四六 ...	四七 ...	四八 ...	四九 ...	五〇 ...	五一 ...	五二 ...	五三 ...	五四 ...	五五 ...	五六 ...	五七 ...	五八 ...	五九 ...	六〇 ...	六一 ...	六二 ...	六三 ...	六四 ...	六五 ...	六六 ...	六七 ...	六八 ...	六九 ...	七〇 ...	七一 ...	七二 ...	七三 ...	七四 ...	七五 ...	七六 ...	七七 ...	七八 ...	七九 ...	八〇 ...	八一 ...	八二 ...	八三 ...	八四 ...	八五 ...	八六 ...	八七 ...	八八 ...	八九 ...	九〇 ...	九一 ...	九二 ...	九三 ...	九四 ...	九五 ...	九六 ...	九七 ...	九八 ...	九九 ...	一〇〇 ...

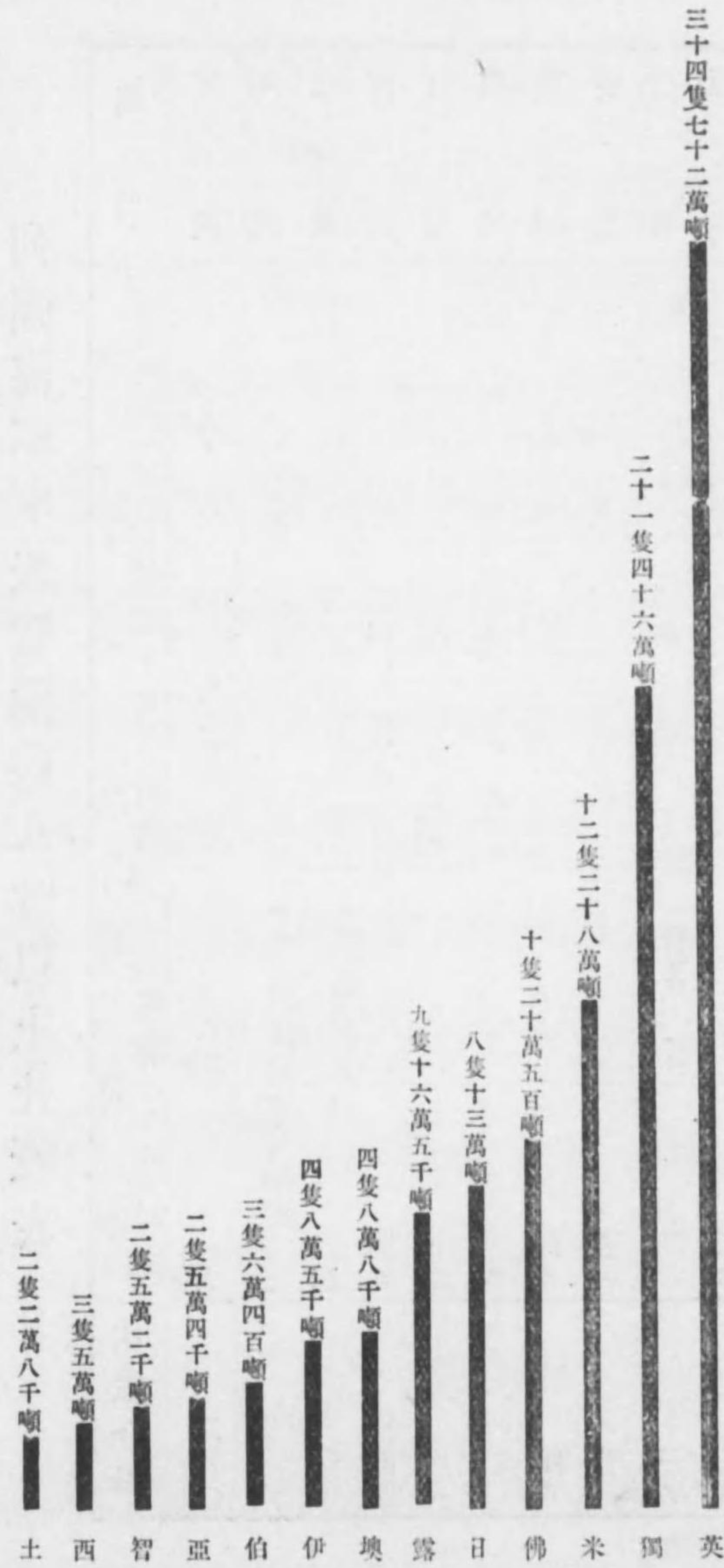
列國下級艦既成未成合計排水量

四十五年三月某所調

(其一)

噸數の概算

(計畫中ノモノヲ除ク)



列強海軍ド級艦備砲(八吋以上)比較表 (其二)

國別	既成			建造中			砲數合計
	一三、五吋砲	一二吋砲	一〇吋砲	一三、五吋砲	一〇吋砲	中	
英國	一八門	一四〇門	九、二吋砲 二〇門	八六門	一六門	一六門	二八〇門
獨米	一一吋砲 一〇〇	五六	九、四吋砲 七二	一四吋砲 八〇	一一吋砲以上三六	二四	二一六
佛日	二四	八	二四	一四吋砲 二〇	四八	二四	一〇〇
露日	八	八	八吋砲 二八	一四吋砲 二〇	五六	四八	一四四
伊埃	二四			一四吋砲 一三	四八	八四	一二〇
亞伯					五一	四八	八八
智國				二四	二四	四八	一〇〇
西國				一四吋砲 二〇	二四	二四	一〇〇
土國							二〇

列強海軍總噸數比較表 (明治四十五年三月某所調)

本表は列強海軍の新舊型は勿論荷も軍艦と云べきものを網羅せるものゝ如し (一號)

國別	戰艦	艦	裝甲巡洋艦
日本	隻數 總排水量 八吋以上ノ砲數	一六隻 二五三、七八〇噸 一一四門	隻數 總排水量 八吋以上ノ砲數
英國	隻數 總排水量 八吋以上ノ砲數	六三隻 一、〇七五、五八五噸 三六四門	隻數 總排水量 八吋以上ノ砲數
米國	隻數 總排水量 八吋以上ノ砲數	三七隻 六一一、七九六噸 三三二門	隻數 總排水量 八吋以上ノ砲數
合計	二四隻	二四隻	二二隻

佛國	獨國	露國	佛國	奧國
總排水量 三八四、六五五噸 八吋以上ノ砲數 二〇〇門	總排水量 六〇四、四一〇噸 八吋以上ノ砲數 二七二門	總排水量 二九二、二〇八噸 八吋以上ノ砲數 一六二門	總排水量 一八二、三五四噸 八吋以上ノ砲數 一三一門	總排水量 二〇五、一〇〇噸 八吋以上ノ砲數 一〇五門
總排水量 二二二、三八八噸	總排水量 二〇六、五九〇噸 八吋以上ノ砲數 九八〇	總排水量 一五五、九一七噸 八吋以上ノ砲數 二六門	總排水量 七九、五三〇噸 八吋以上ノ砲數 二一門	總排水量 一八、八七〇噸 八吋以上ノ砲數 四門
三隻	一四隻	一〇隻	一〇隻	三隻

(二號)

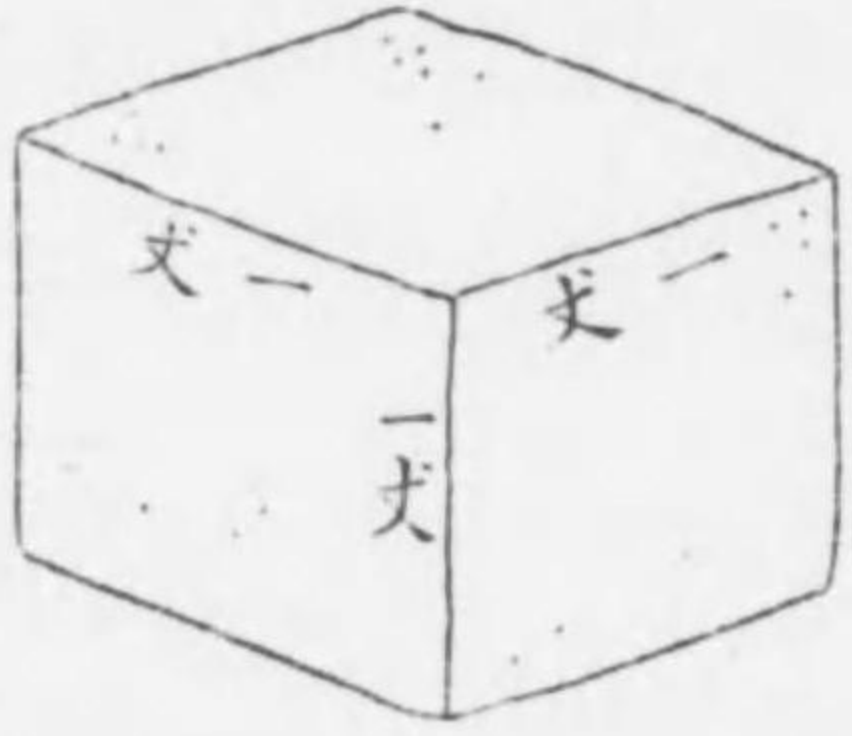
獨國	佛國	米國	英國	日本	國別
五隻 二〇、六〇〇噸	四隻 三〇、一二二噸	五隻 四三、八〇〇噸	十隻 一六八、九〇〇噸	七隻 二五、七三六噸	一等巡洋艦
四隻 一五三、四八〇噸	五隻 二一、九二二噸	一隻 五、八六五噸	四隻 二四六、七八〇噸	十隻 五八、五四九噸	二等巡洋艦
	二隻 四、七八二噸	十二隻 三六、五六〇噸	三隻 六七、一六〇噸	八隻 二三、九一八噸	三等巡洋艦
		三隻 一一、二五〇噸		九隻 一一、六四三噸	通報艦

米國	佛國	獨國	露國	伊國	埃國
五〇隻 三三、七七七噸	九〇隻 四〇、九五五噸	一一三隻 六六、三五四噸	七七隻 三〇、九六五噸	二九隻 一一、七七三噸	二〇隻 一〇、六五〇噸
三二隻 五、二〇一噸	二〇七隻 二〇、五二二噸		五三隻 九、八〇七噸	八六隻 一三、一五六噸	五四隻 九、二二一噸
三九隻 一二、七四九噸	八一隻 二四、四七四噸	二四隻		二〇隻 四、五九五噸	一三隻 三〇、三八〇噸

(三號)

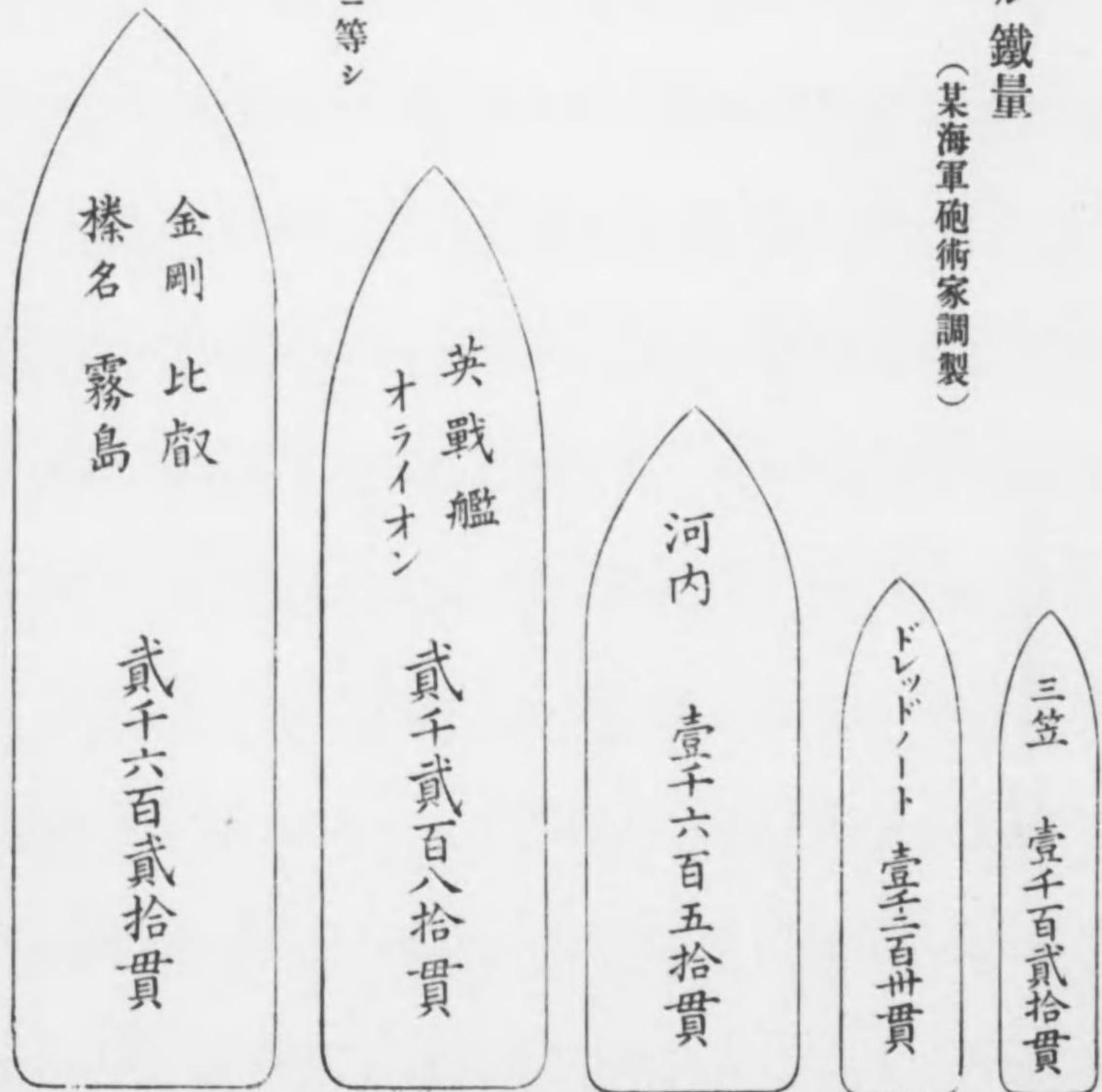
國別	日本	英 國
驅逐艦	六〇隻 二四、〇〇八噸	二二二隻 一二八、一七九噸
水雷艇	五七隻 五、八六三噸	四九隻 一一、七六一噸
潛水艇	一三隻 二、五〇七噸	八〇隻 三二、〇四四噸
露 國	伊 國	埃 國
八隻 四九、二七二噸		七隻 二一、二一〇噸
	七隻 一九、七九三噸	
二二隻 六、九八五噸	三隻 三、四七二噸	

一千貫目ハ一丈立方ノ石ノ重量ニ等シ



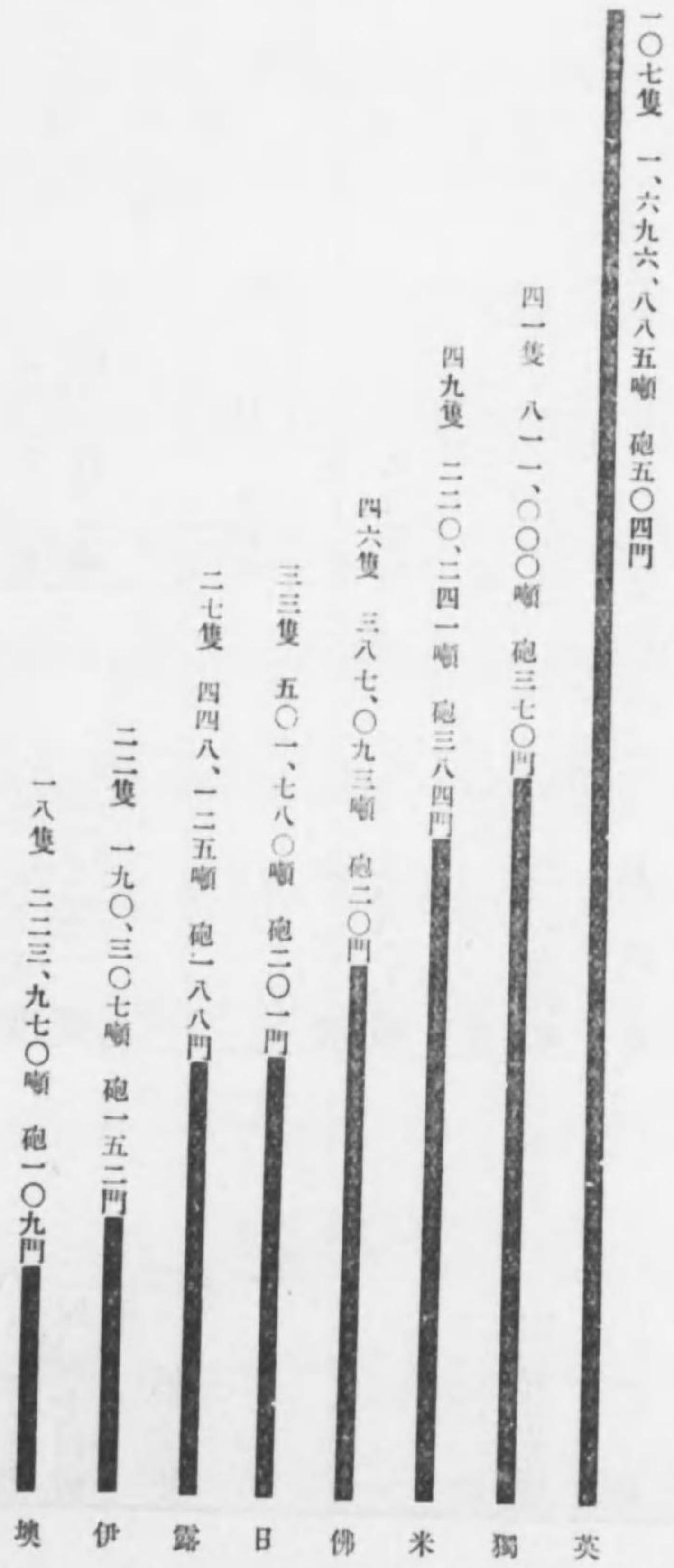
一分間ニ一舷ヨリ射出シ得ル鐵量

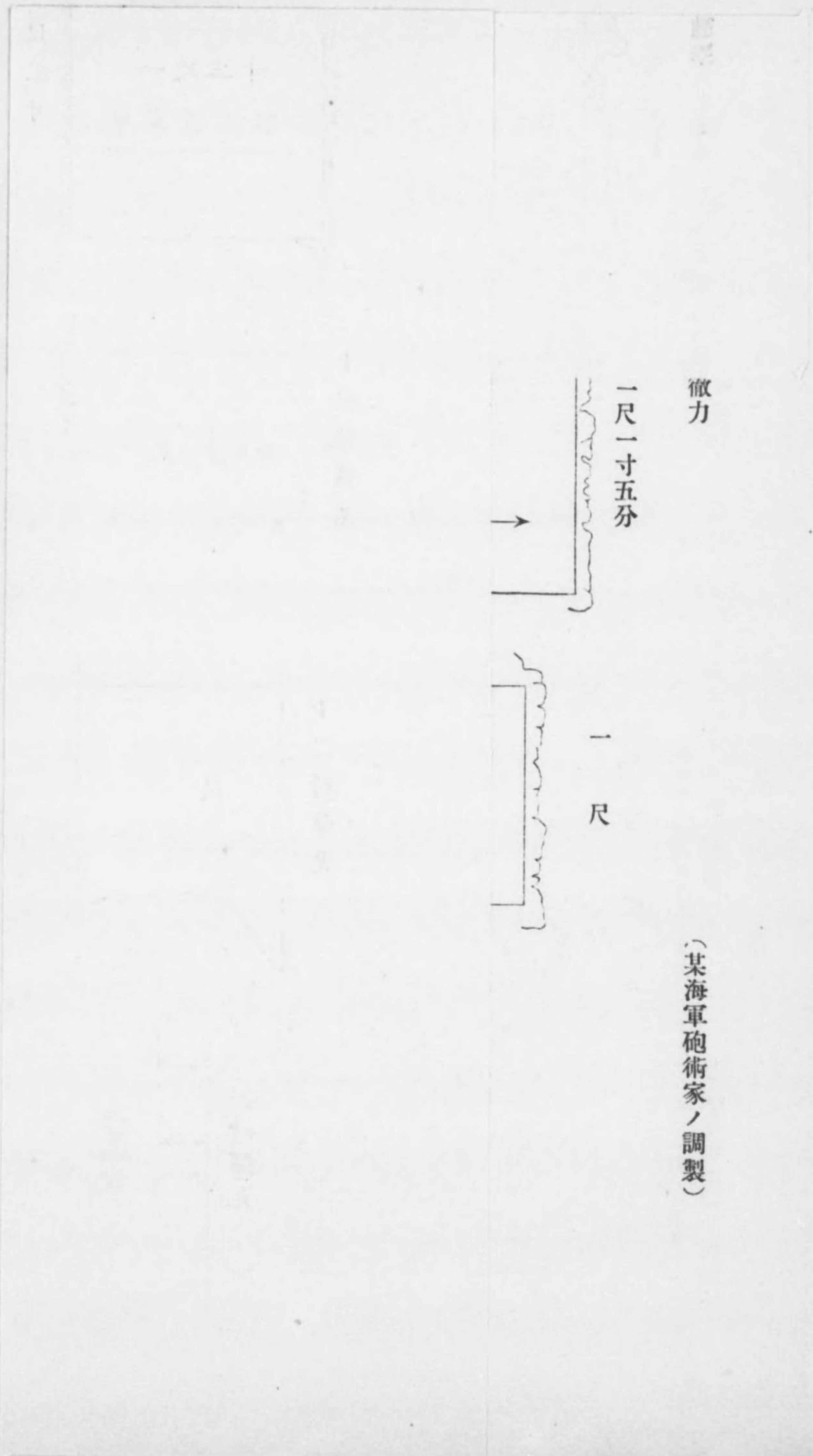
(某海軍砲術家調製)



列強海軍力比較表

(戰艦及裝甲巡洋艦)



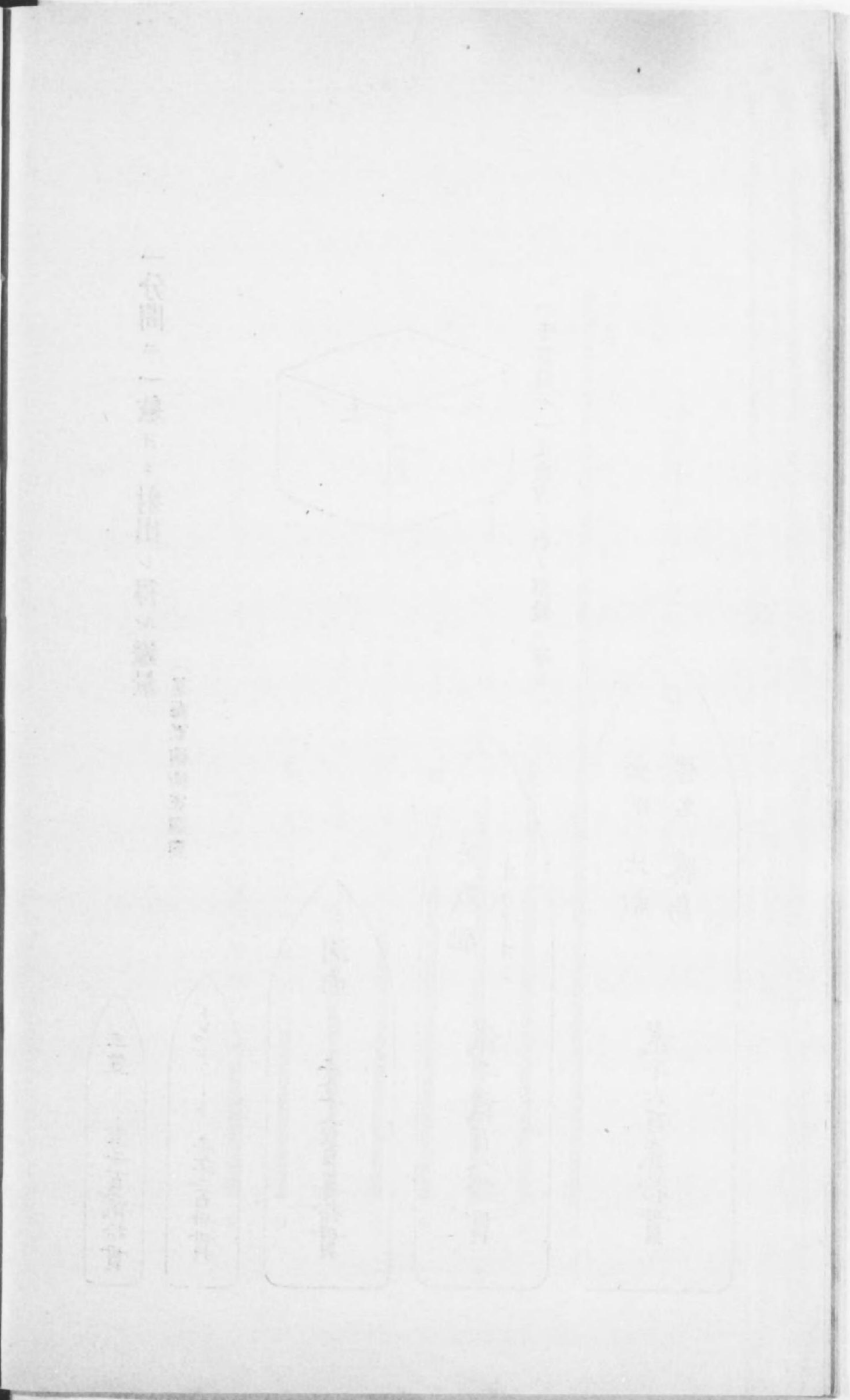


徹力

一尺二寸五分

一尺

(某海軍砲術家ノ調製)



一尺二寸五分

一尺

一尺二寸五分

一尺

一尺二寸五分

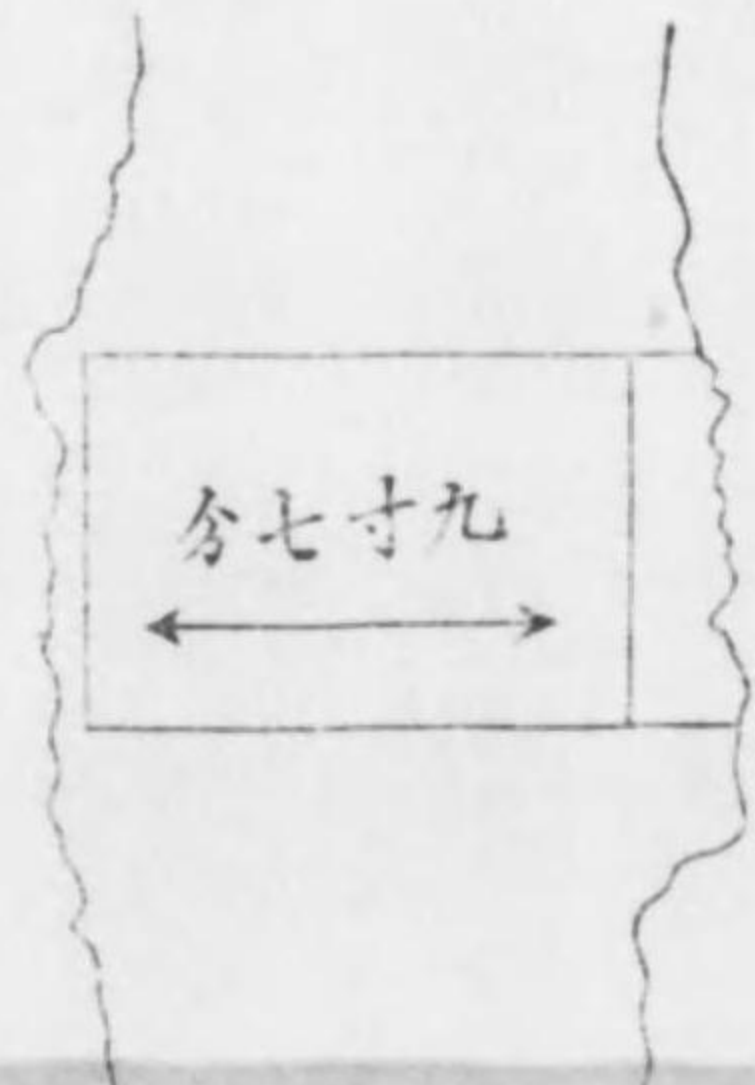
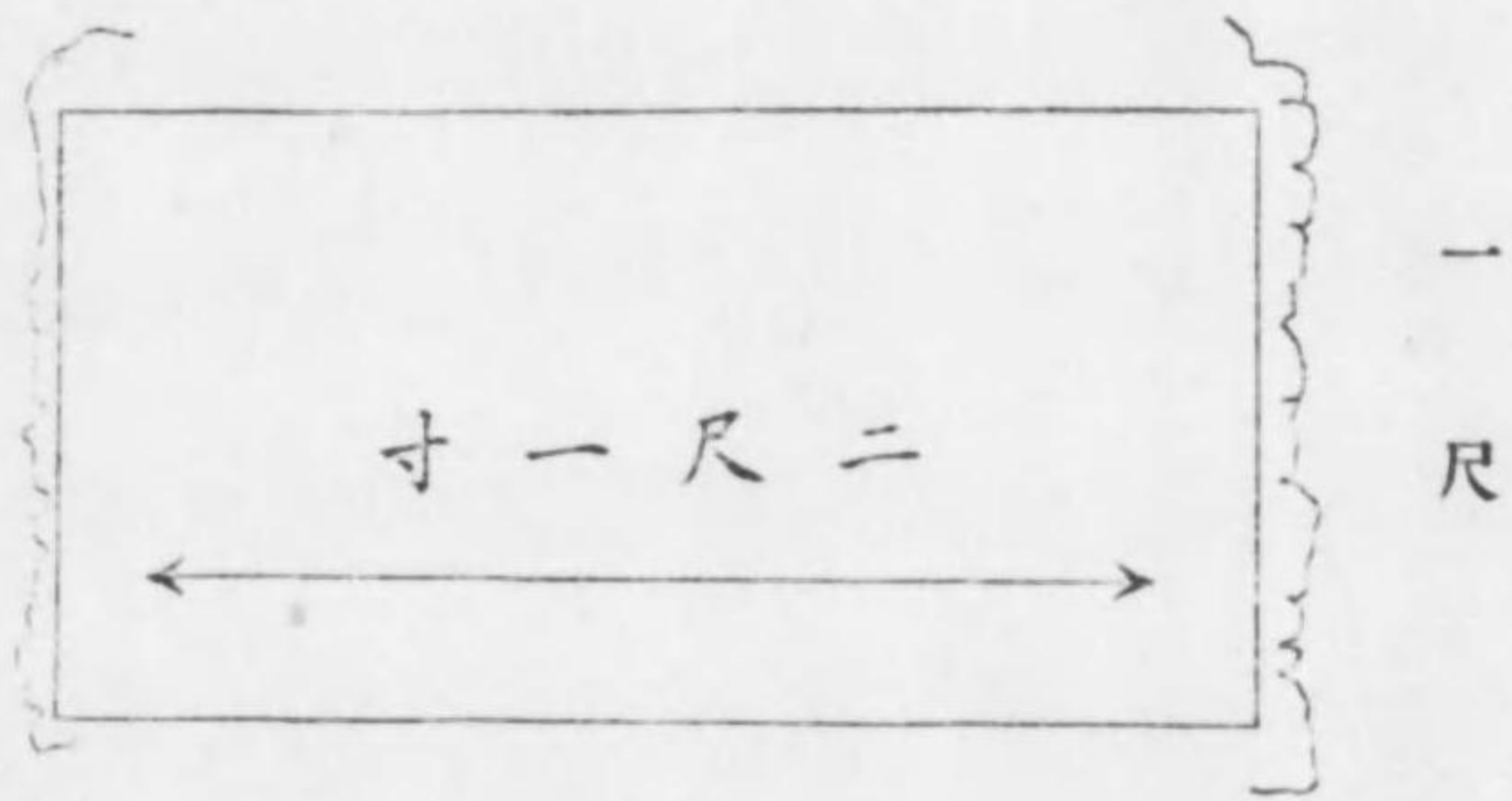
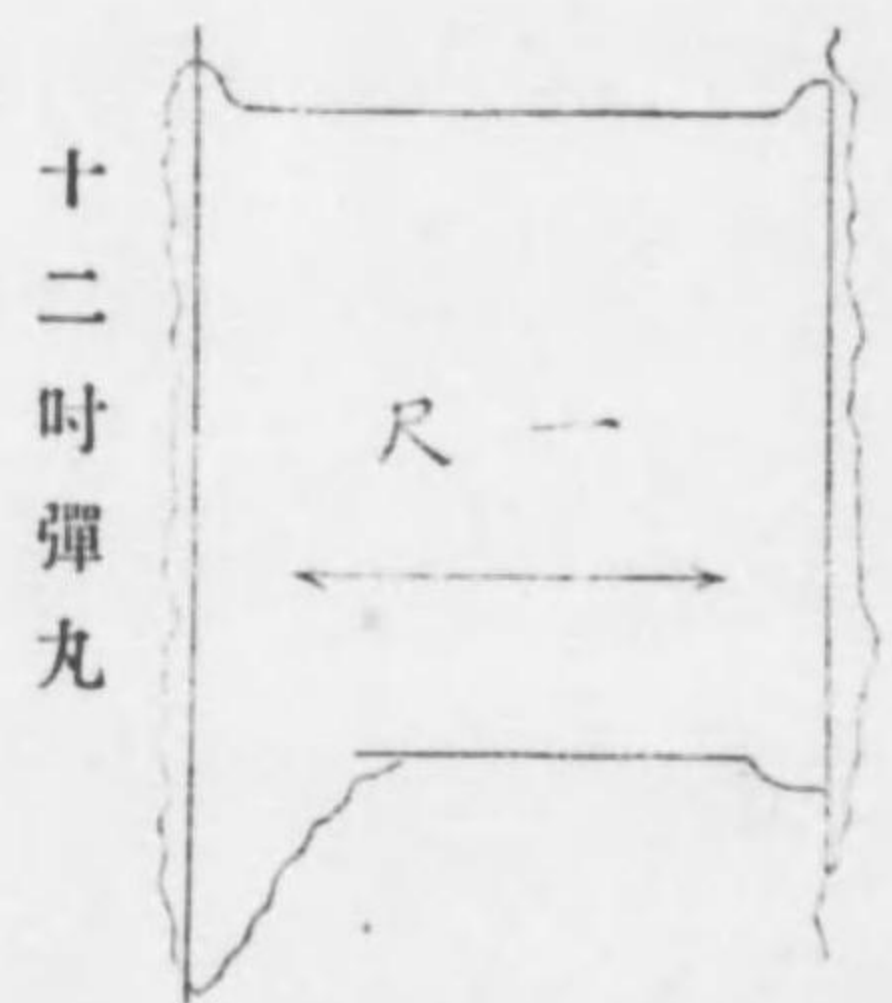
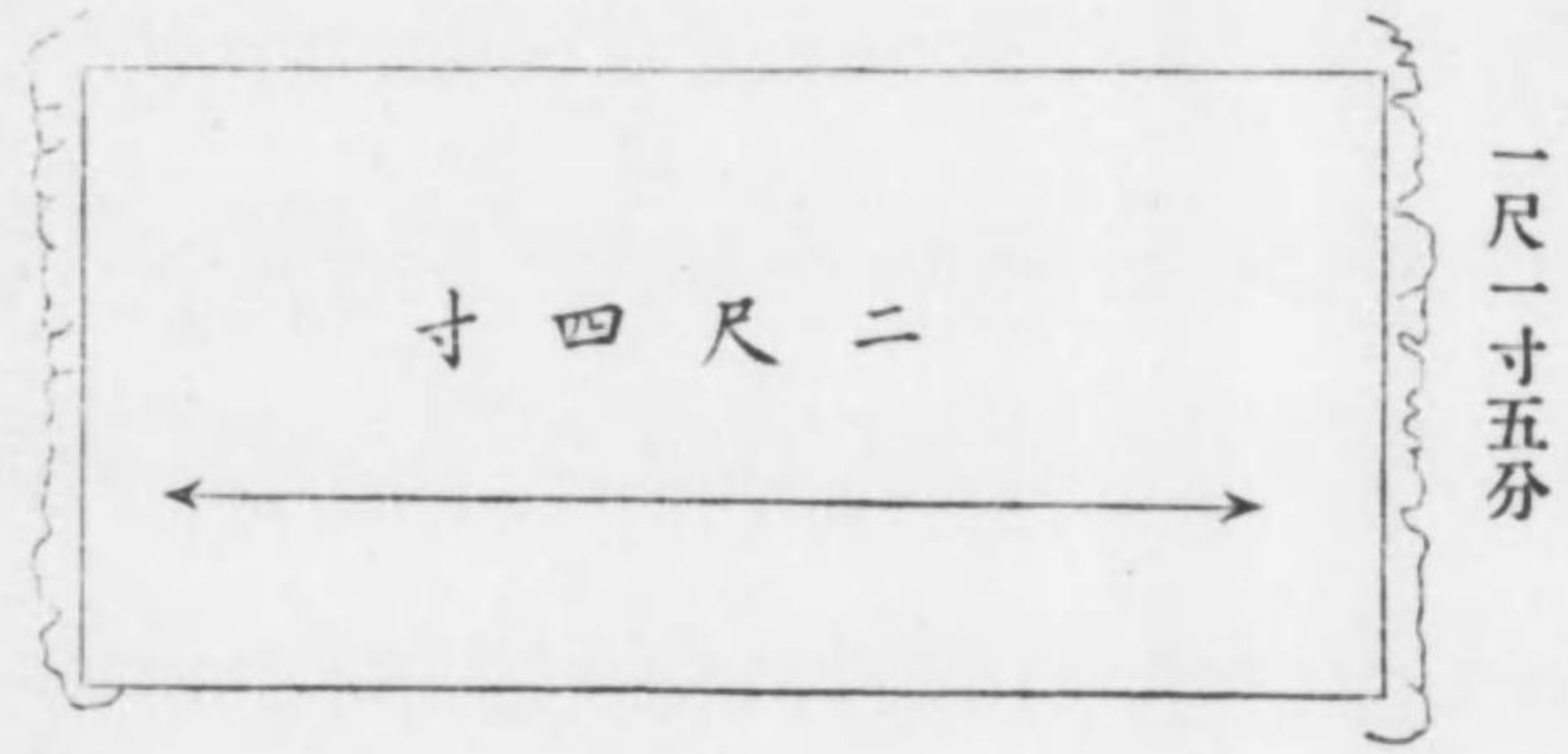
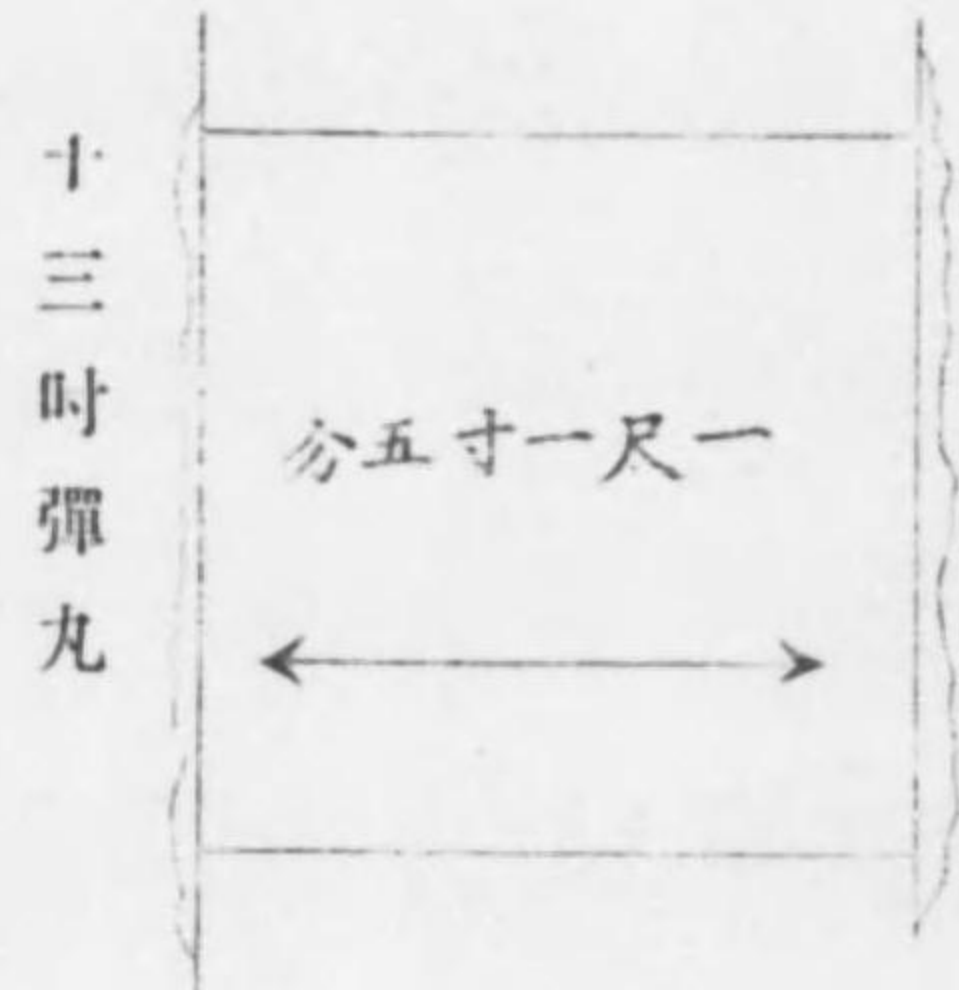
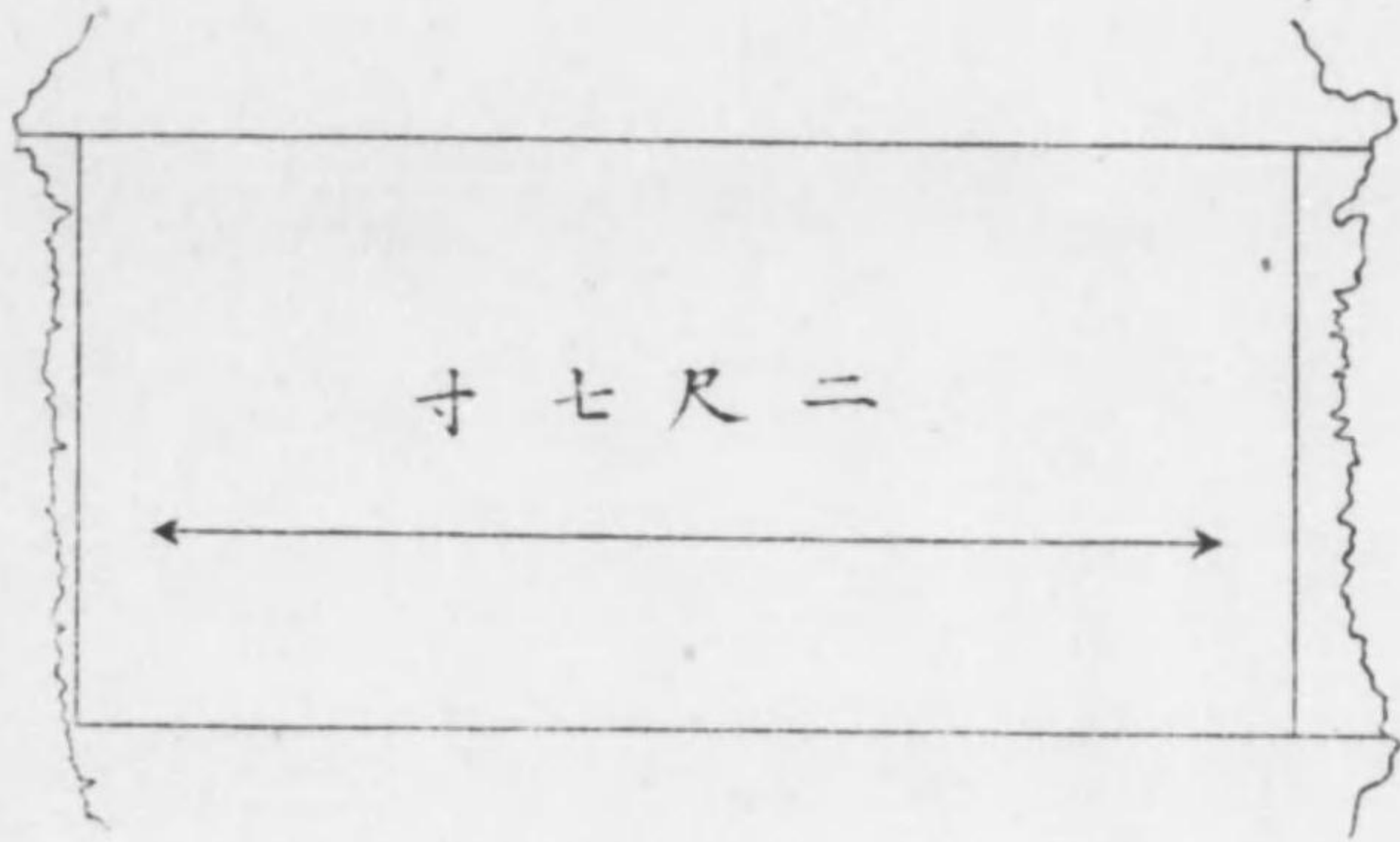
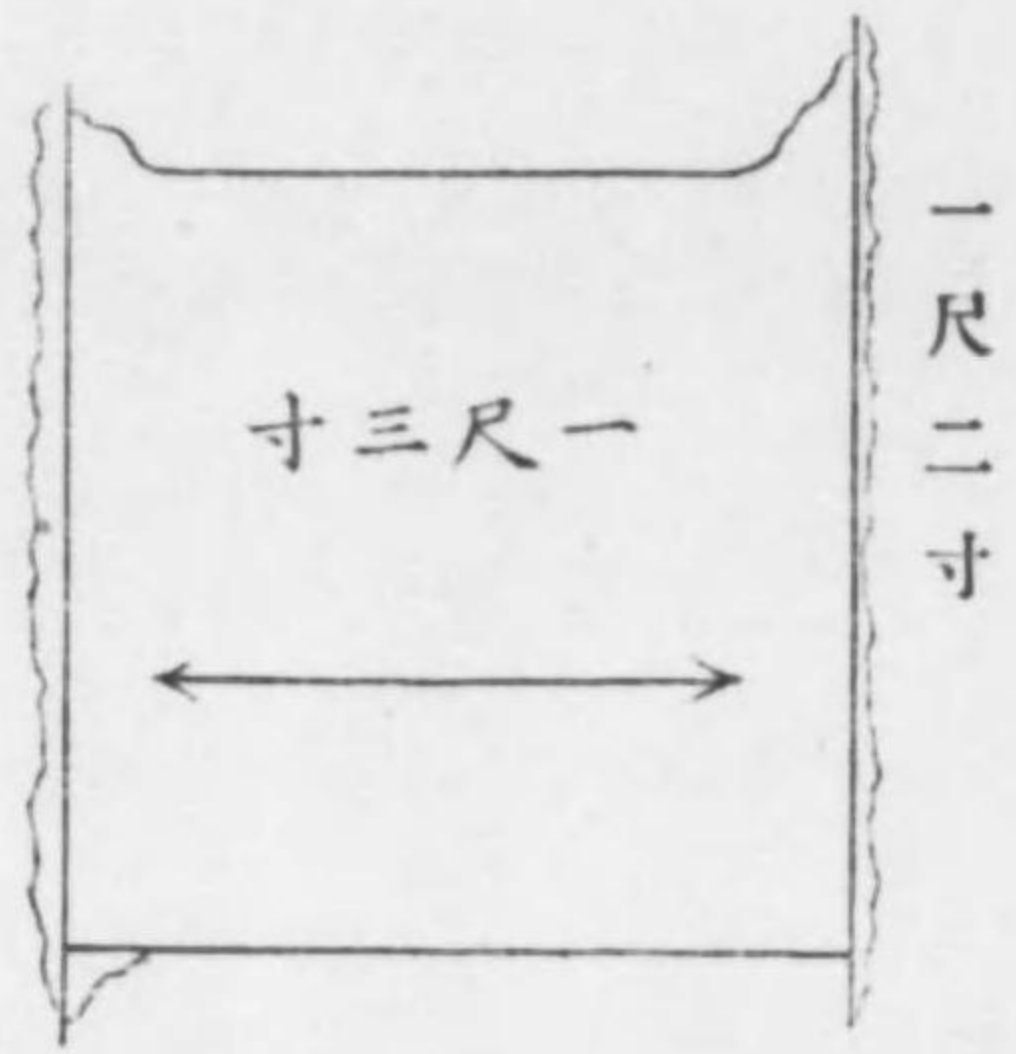
一尺

一尺二寸五分

一尺

最新堅甲

普通鐵板

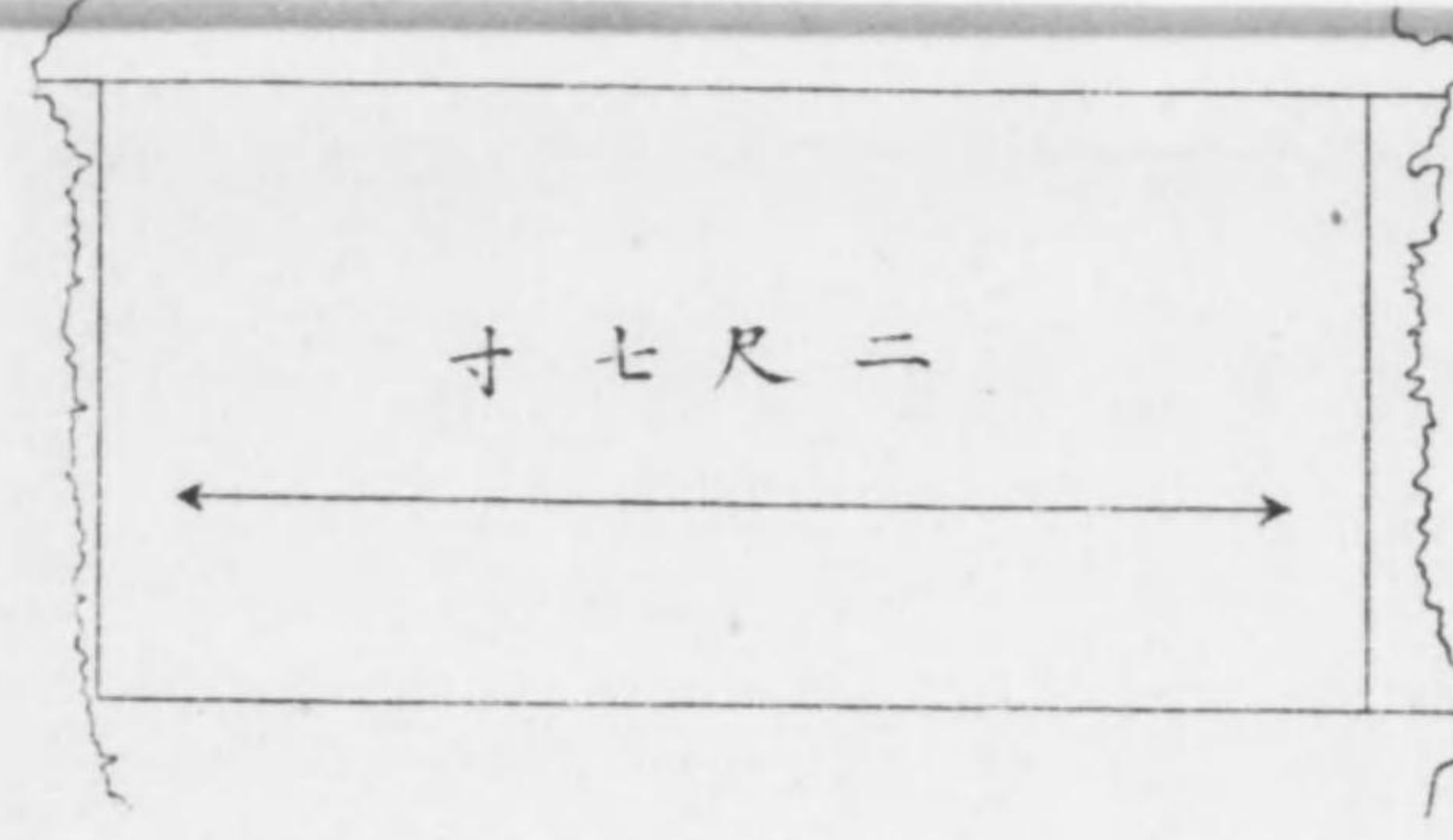


交戦距離八千米突(二里)ニ於ケル穿徹力

(某海軍砲術家ノ調製)

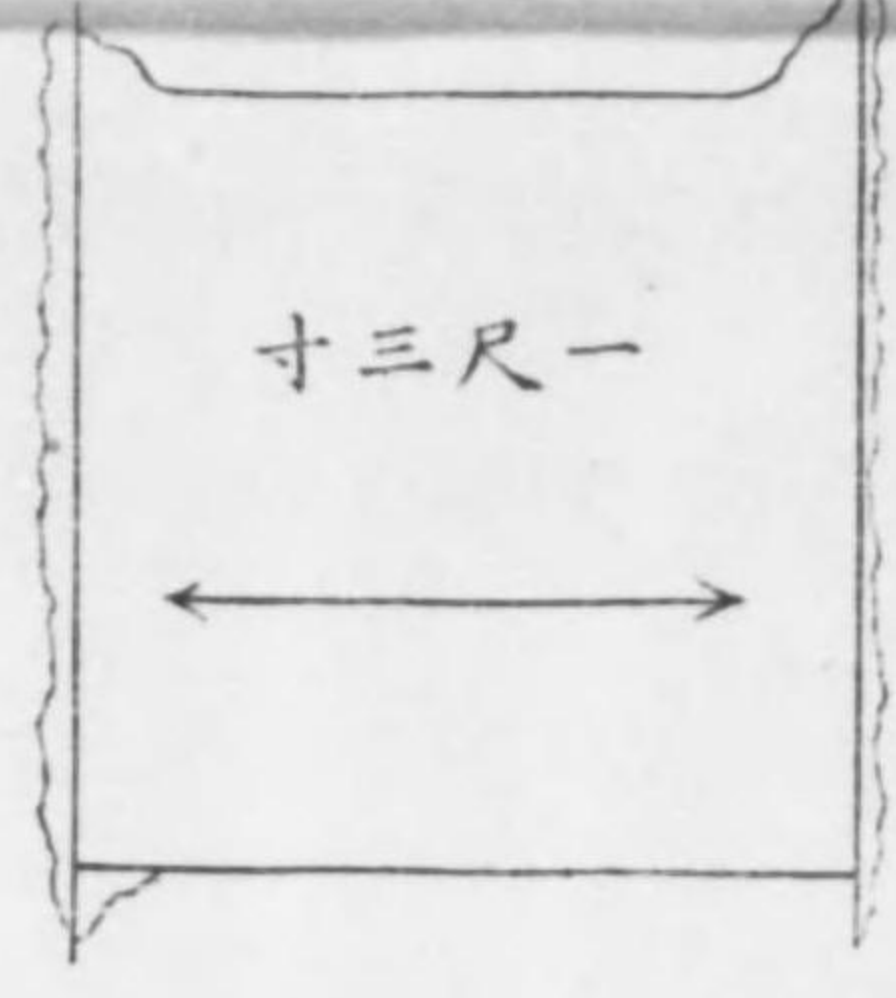
交戦距離八千米突(二里)ニ於ケル穿徹力

一尺二寸



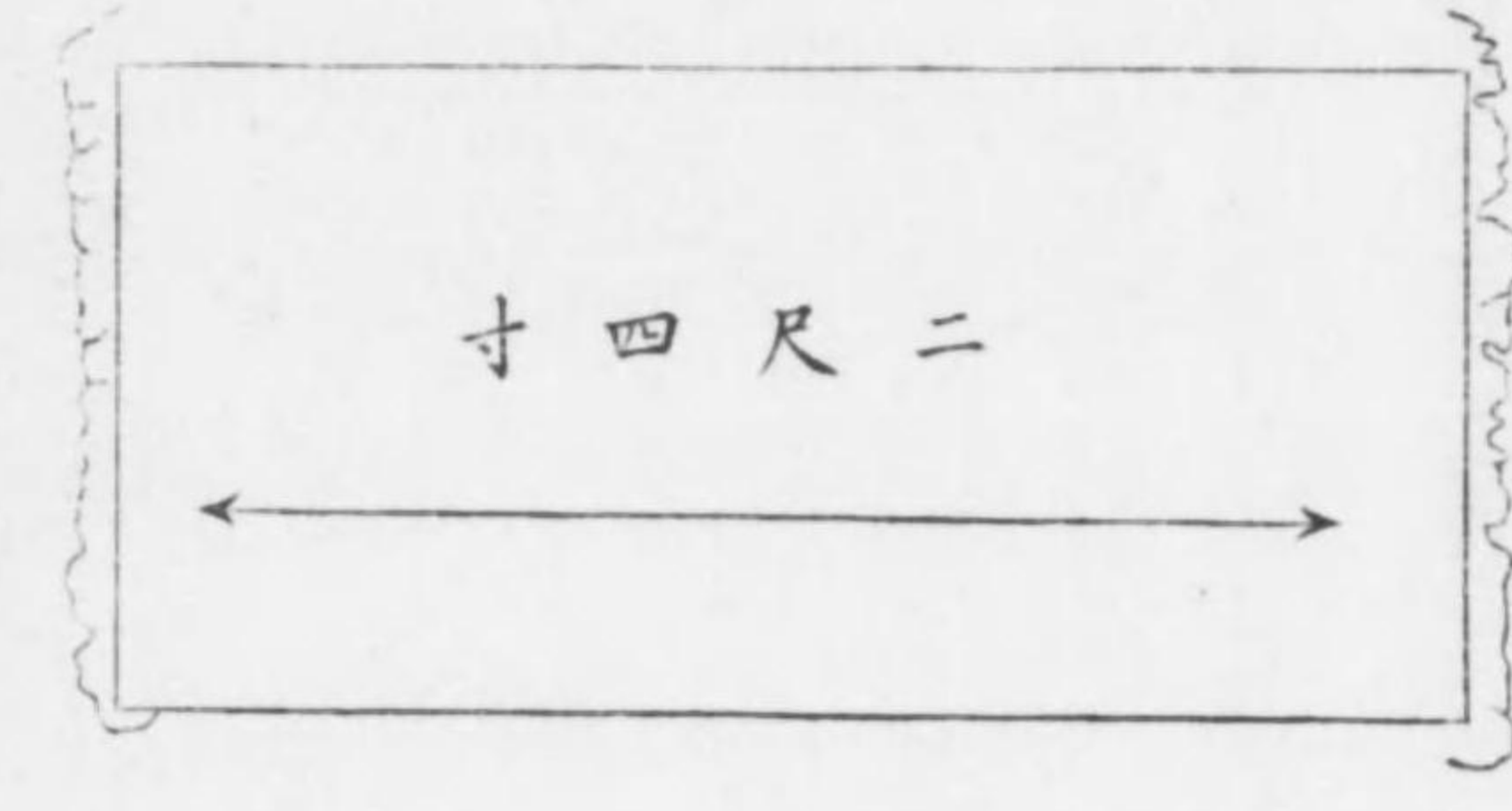
寸七尺二

一尺二寸



寸三尺一

一尺一寸五分



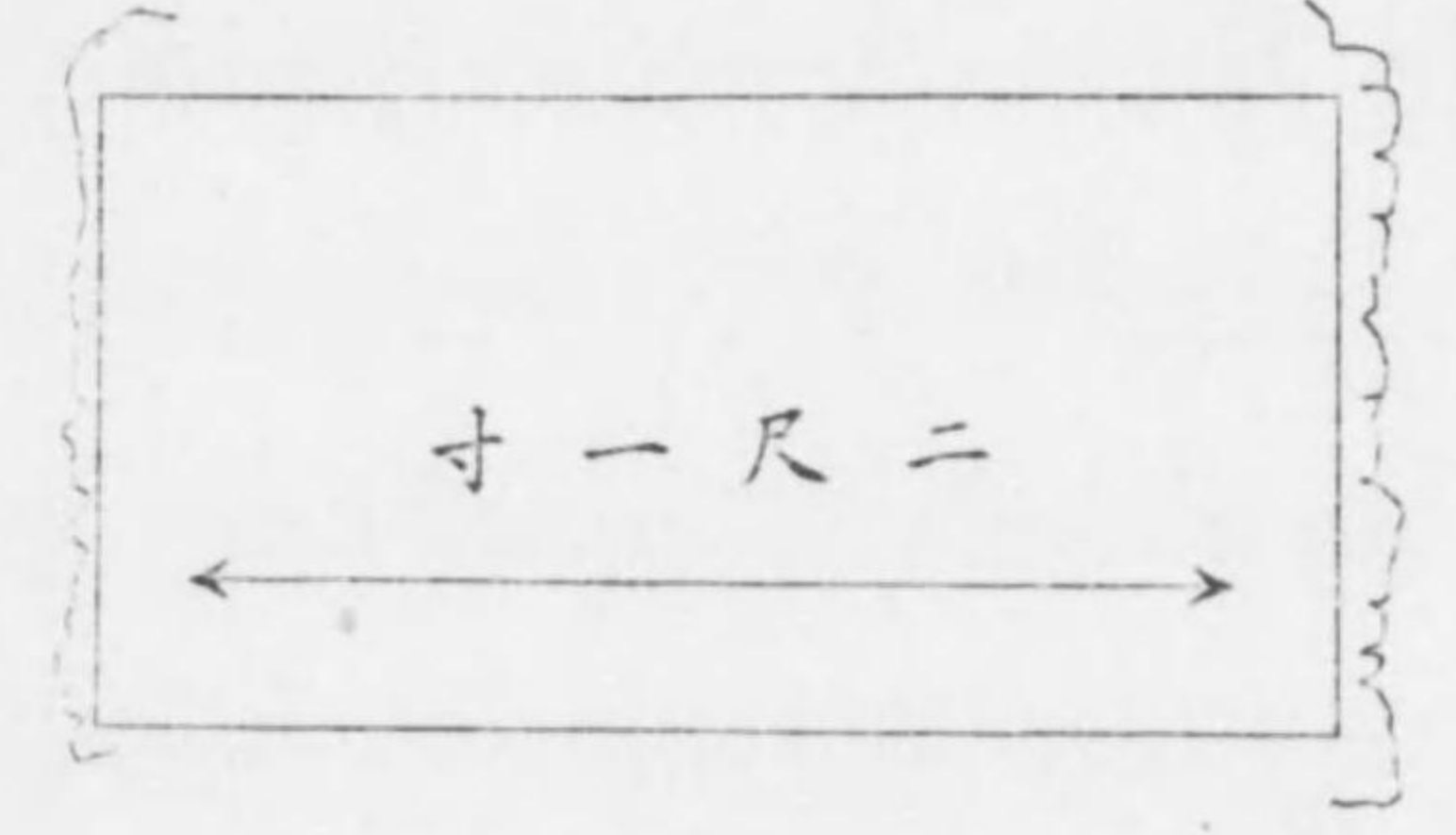
寸四尺二

十三吋彈丸



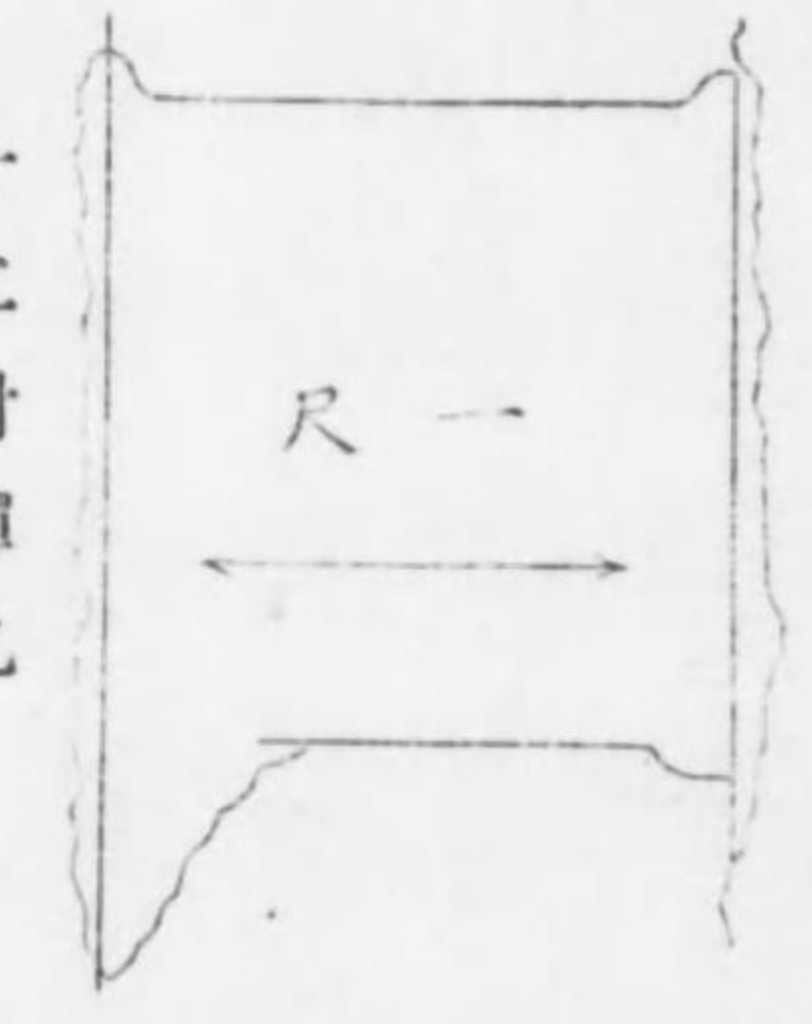
分五寸一尺一

一尺



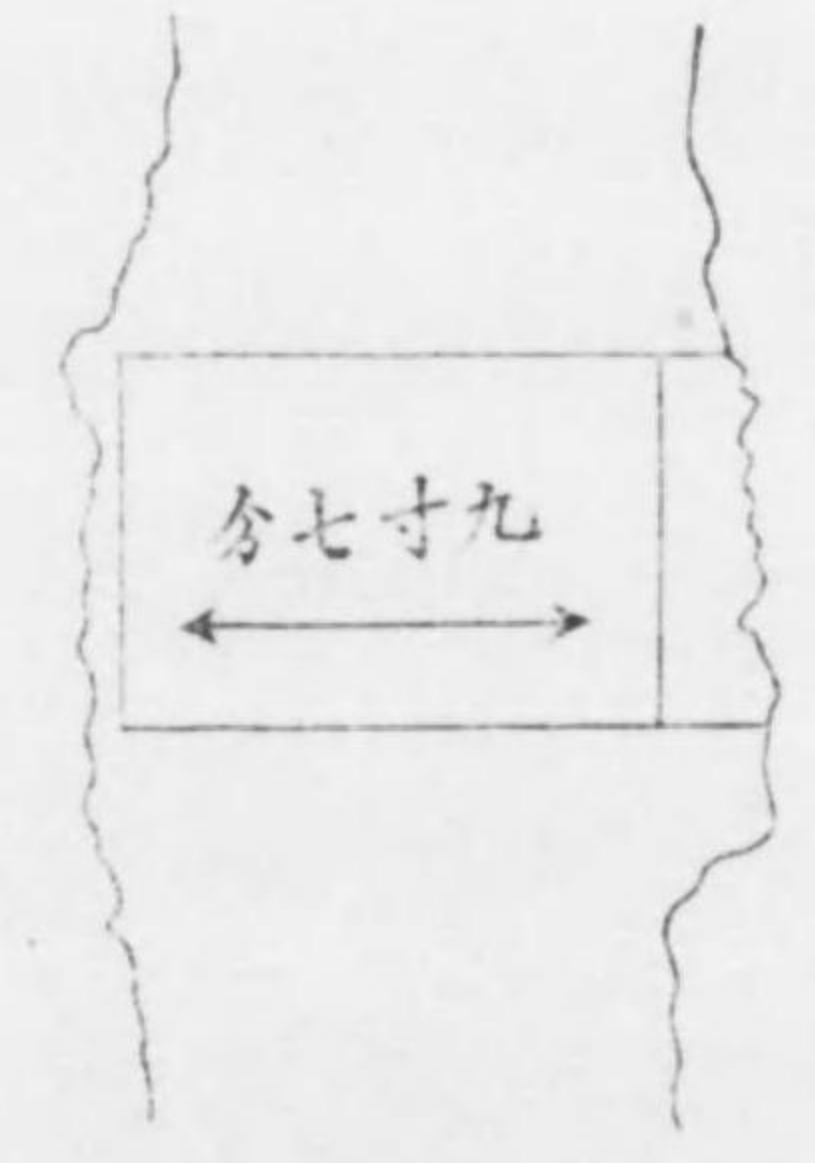
寸一尺二

十二吋彈丸



尺一

(某海軍砲術家ノ調製)

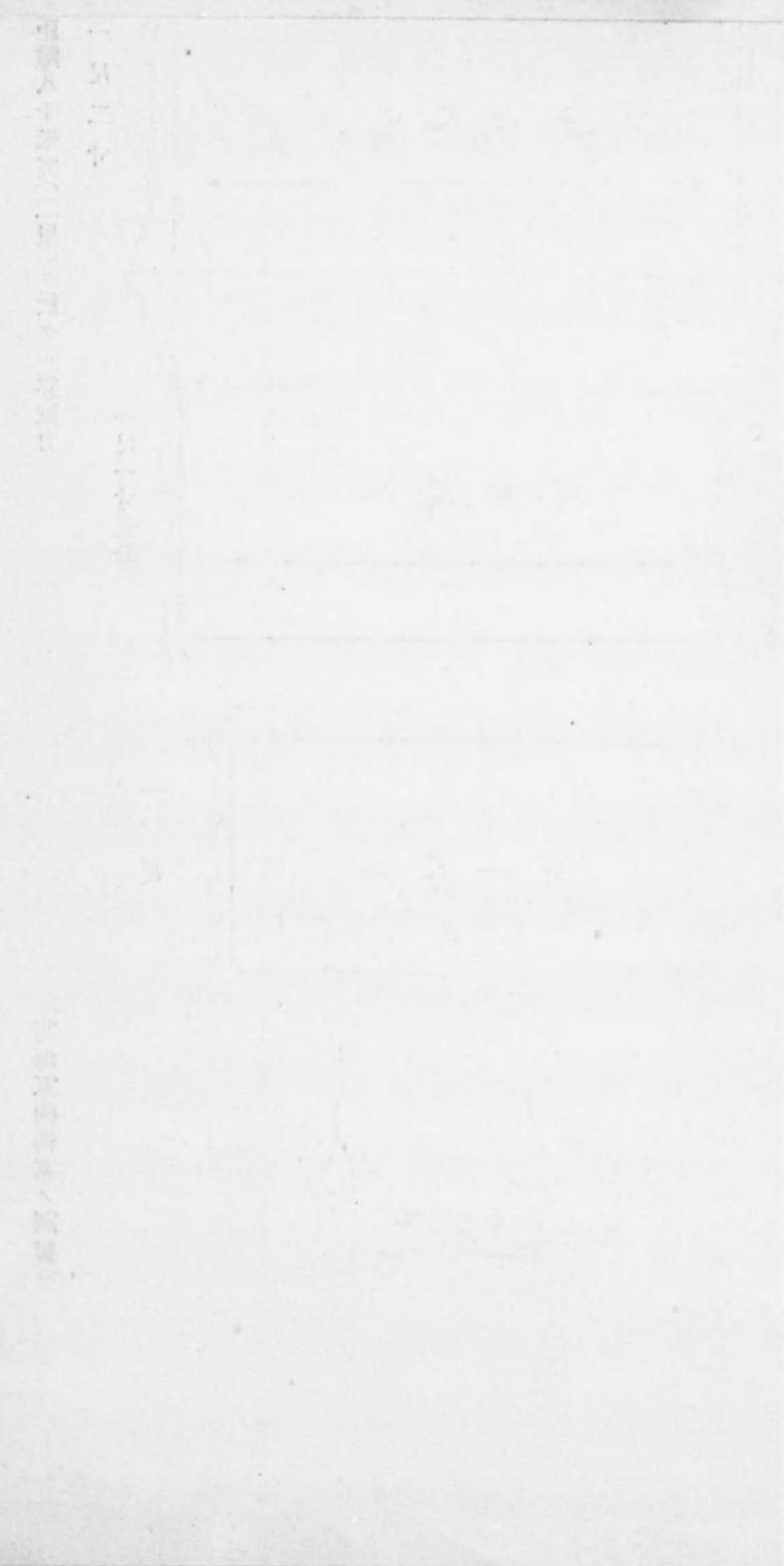


分七寸九

六吋彈丸

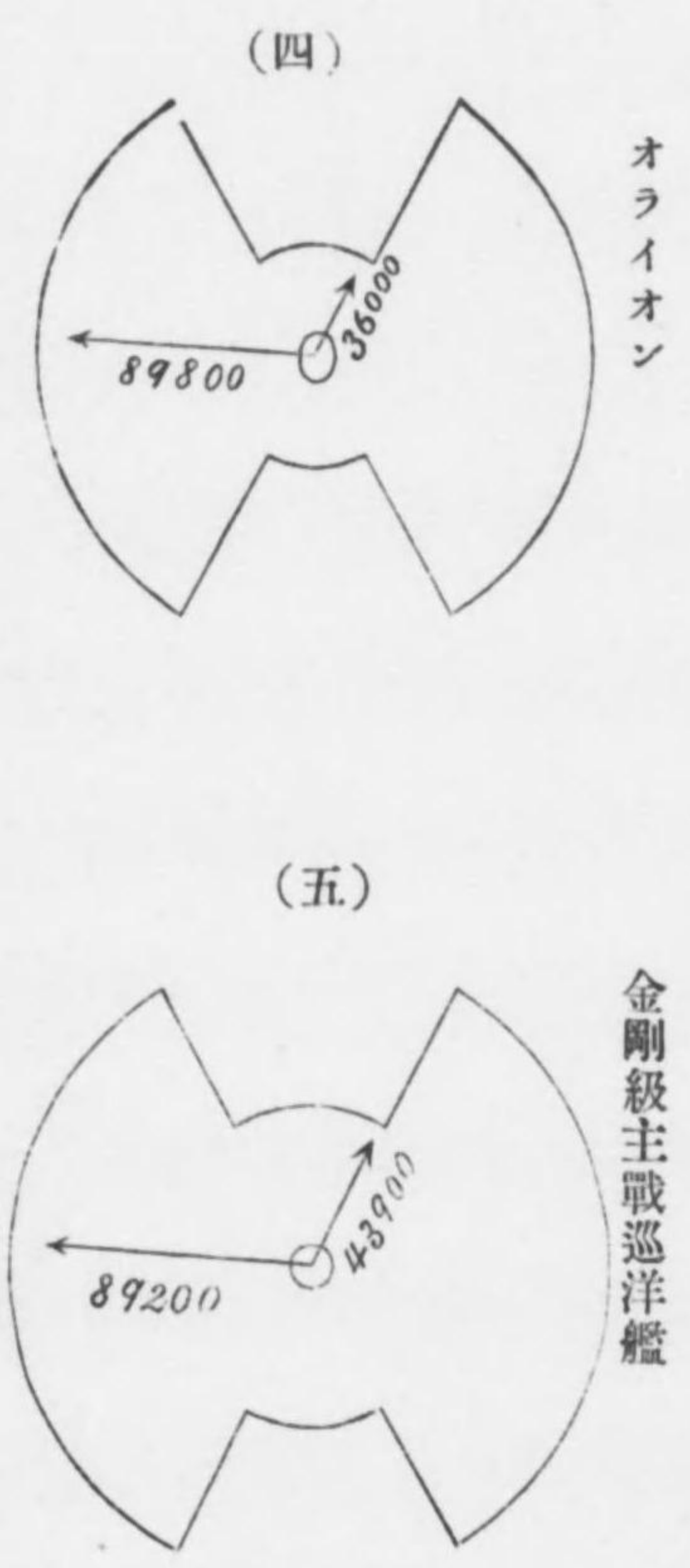
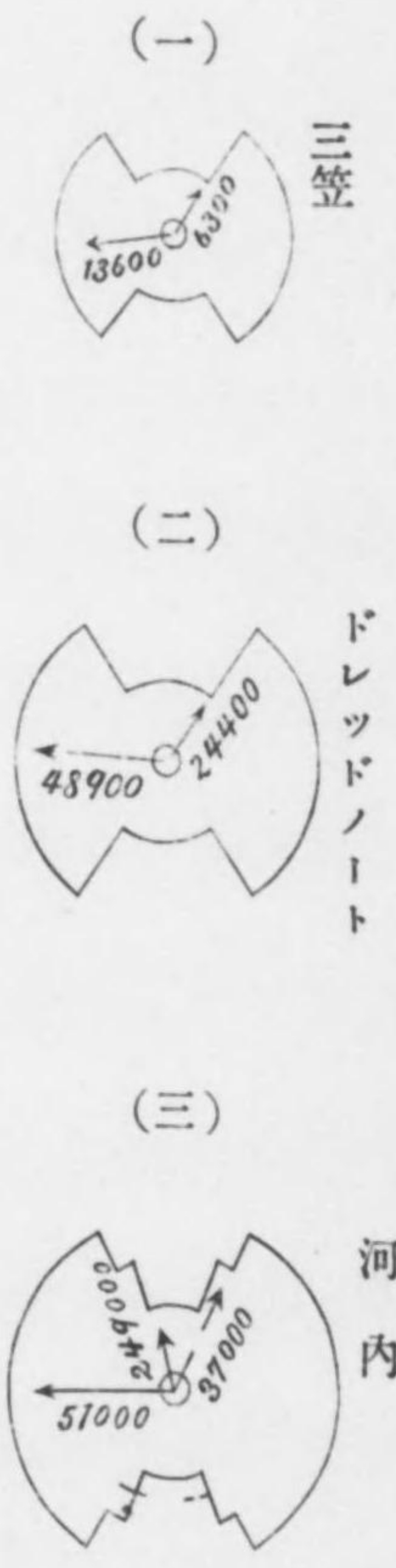


二寸八分



交戦距離八千米突(二里)ニ於ケル各方面ニ對スル砲力比較
 (某海軍砲術家ノ調製)

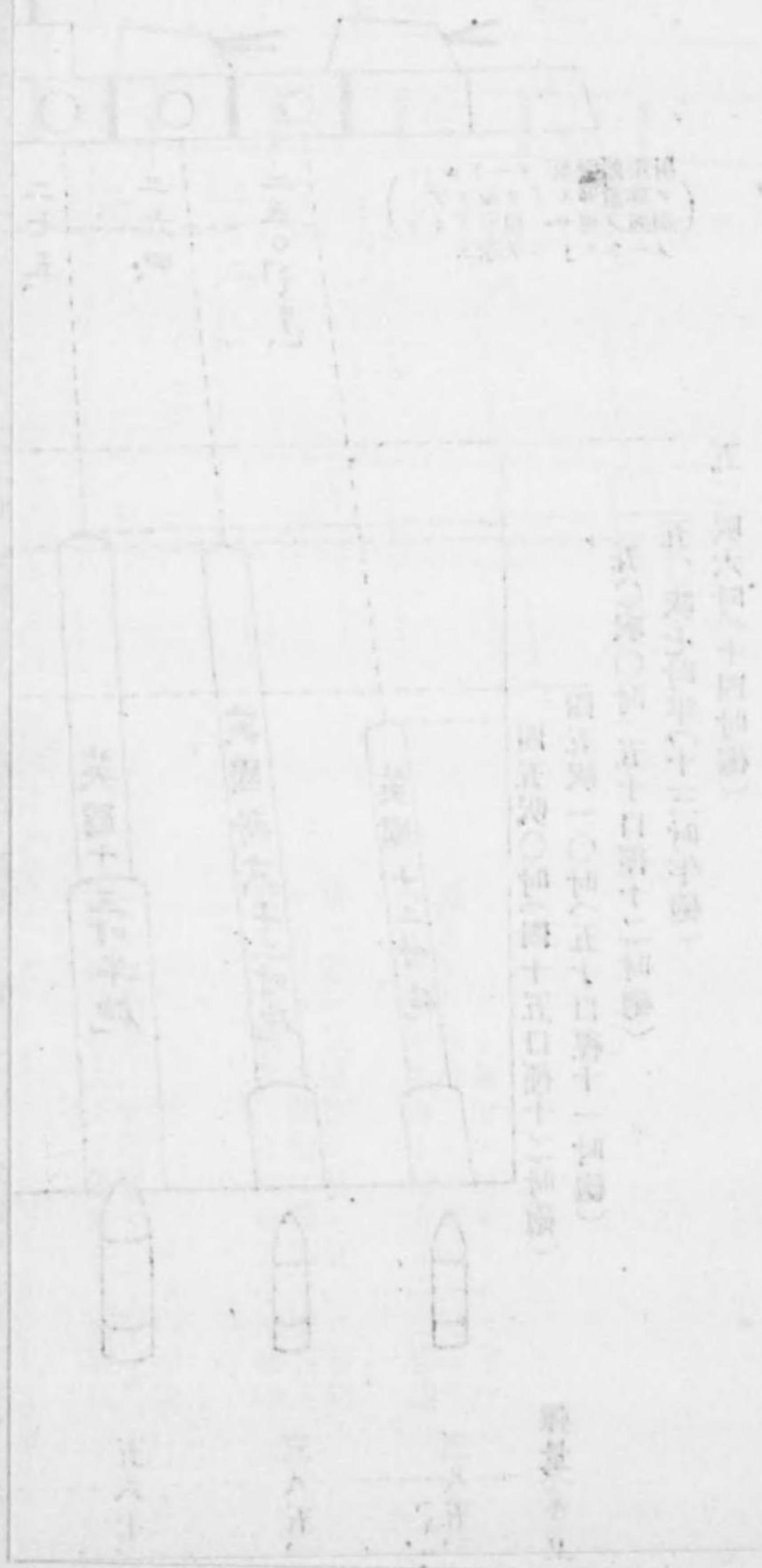
(壹米噸ハ貳百七十貫ノ重量ヲ三尺三寸ノ高サニ揚ル仕事量)



列國巨砲比較圖

註、砲身彈丸彈痕ハ各々大小長短ノ比ヲ表ハス装甲ハ

- 注意
- 一、口徑ノ増大ガ如何ニ急
 - 二、我が最新ノ就役戰艦河
 - 三、獨逸ニ於イテ冶金學造



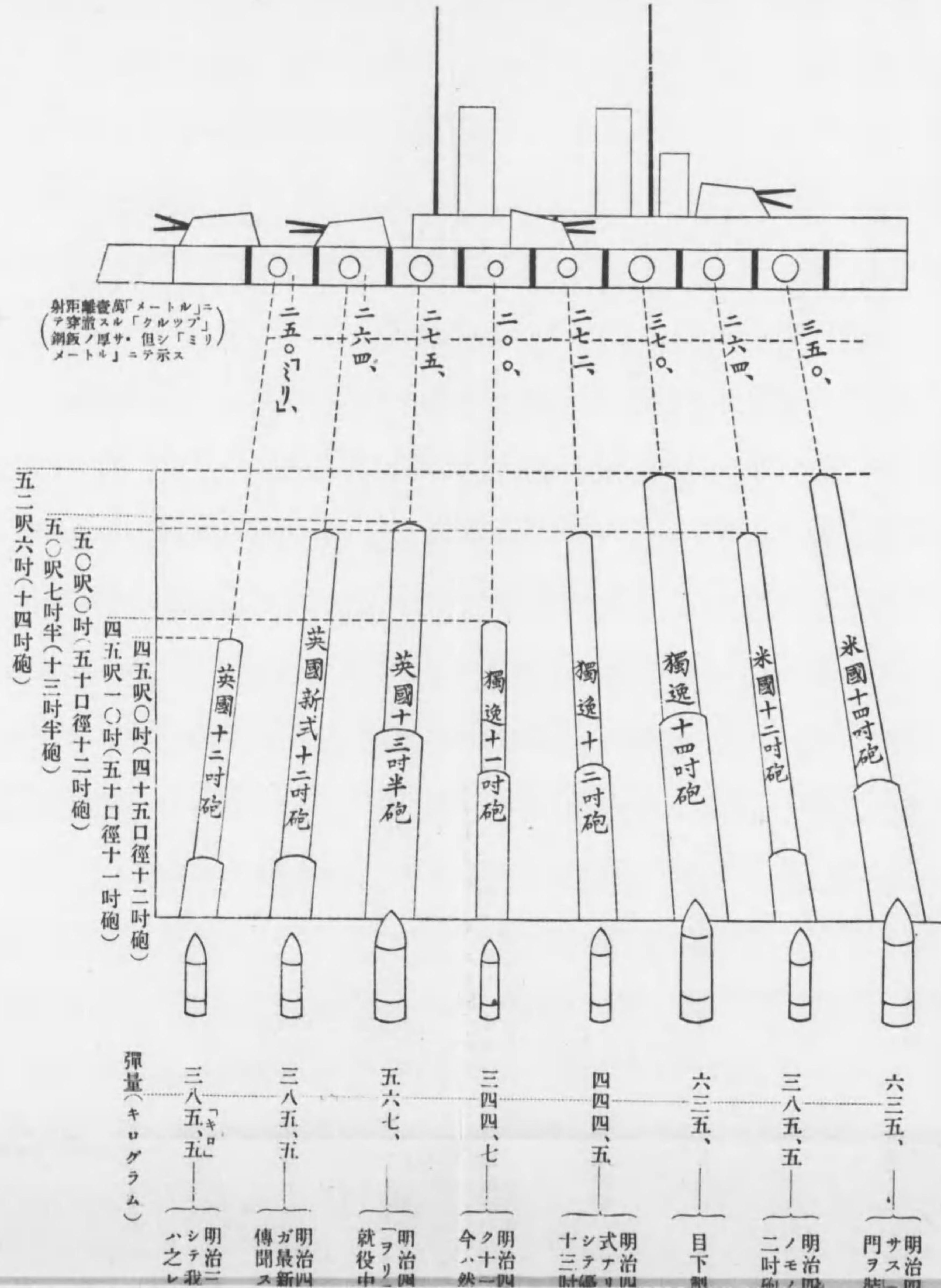
列國巨砲比較圖

註、砲身彈丸痕ハ各々大小長短ノ比ヲ表ハス裝甲ハ各下記ノ如ク厚サヲ異ニス

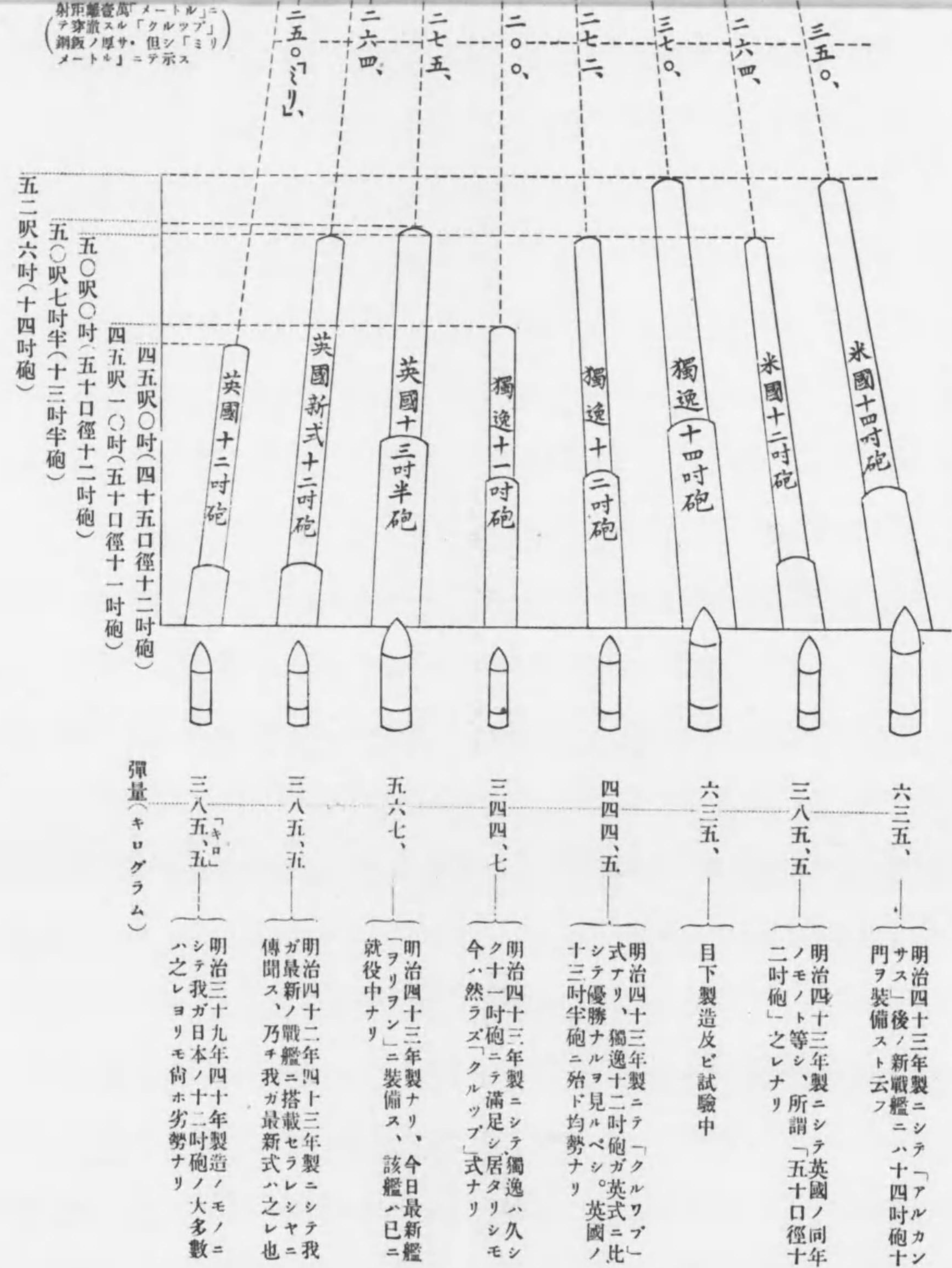
(某海軍將校意匠)

注意

- 一、口径ノ増大ガ如何ニ急激ニ彈量及ビ穿徹力ヲ増大スルカラ見ルベシ。
- 二、我が最新ノ就役戰艦河内及ビ竣工セントスル攝津ハ十四吋砲ヲ有セズ已ニ大勢ニ後レツ、アルヲ
- 三、獨逸ニ於イテ冶金學造砲學ノ進歩著シク其ノ「クルツプ」砲ガ非常ニ精良ナルヲ見ルベシ。



一、口径ノ増大ガ如何ニ急激ニ彈量及ビ穿徹力ヲ増大スルカラ見ルベシ。
 二、我が最新ノ就役艦河内及ビ竣工セントスル攝津ハ十四吋砲ヲ有セズ已ニ大勢ニ後レツ、アルヲ知ルベシ。
 三、獨逸ニ於テ冶金學造砲學ノ進歩著シク其ノ「クルツプ」砲ガ非常ニ精良ナルヲ見ルベシ。
 大小長短ノ比ヲ表ハス裝甲ハ各下記ノ如ク厚サヲ異ニス
 (某海軍將校意匠)



「メートル」ニテ示ス
 「クルツプ」ニテ示ス
 「アリソン」ニテ示ス
 「クルツプ」ニテ示ス
 「アリソン」ニテ示ス

列國海軍費統計

年 度	英 國	米 國	獨 國	佛 國
一八〇三年(明治卅六年)	三四八、二一〇、〇九四	二〇七、八一六、七一四	一〇一、六三六、一八四	一一六、五一三、九二
一八〇四年(明治卅七年)	三五九、四二五、八八六	二三七、三八九、六一八	九八、七三三、二九〇	一一二、〇二九、三三
一八〇五年(明治卅八年)	三二三、二七〇、四四四	二二三、一七八、二〇〇	一一〇、六四八、八七四	一一一、四八〇、三五
一八〇六年(明治卅九年)	三〇六、八九〇、八一八	二二六、三五九、二九〇	一一七、二八五、四二六	一一七、七二四、七〇
一八〇七年(明治四十年)	二九八、八二七、四三六	二三八、四六三、二〇六	一三九、〇四二、〇七四	一一九、三一一、一五
一八〇八年(明治四十一年)	三一五、一五四、〇〇四	二四六、二五七、四七四	一六二、一五三、八五二	一二二、三四二、一五
一八〇九年(明治四十二年)	三四二、六八三、四五八	二七六、五九一、三五四	一九〇、八六五、四〇〇	一三八、七八九、二
一八一〇年(明治四十三年)	三九五、九三四、五七〇	二六五、四五六、八二二	二〇七、四七三、五一〇	一四三、六一九、八
一八一一年(明治四十四年)	四三二、八八〇、一四六	二五五、六三一、五三二	二一五、二五七、七四〇	一五九、四七四、一
一八一二年(明治四十五年)	四三〇、四〇五、七六〇		二一四、九二七、三二二	一六三、八〇八、二〇
一八〇三年(明治卅六年)	一一七、六三七、七一二	二〇、四三一、六三二	四八、六三四、一一〇	
一八〇四年(明治三十七年)	一一六、五八五、一五六	二〇、四二四、九四〇	五一、〇四五、六二〇	
一八〇五年(明治三十八年)	一二〇、四八四、二〇二	三七、二二六、六四〇	五〇、四二九、四七八	戰時中に就き内容
一八〇六年(明治三十九年)	一〇七、四六〇、一三六	二三、二九〇、〇七二	六〇、二〇一、七一〇	
一八〇七年(明治四十年)	九〇、五五九、〇二二	二六、六六七、六二〇	五三、七七四、〇四四	八二、四八二、二
一八〇八年(明治四十一年)	九八、一九〇、二八二	二三、二一四、〇七〇	六〇、五七一、二〇四	八〇、九六一、五
一八〇九年(明治四十二年)	九三、〇二〇、七二二	二五、七七四、七一六	六一、〇四四、九〇二	七二、一八九、二
一八一〇年(明治四十三年)	九四、四八八、六五〇	二七、一二三、六三二	七一、三〇二、七八二	七五、七二二、一
一八一一年(明治四十四年)	一一三、六三四、九四〇	五〇、〇七八、五八二	七四、五九一、九〇〇	八六、八〇九、七
一八一二年(明治四十五年)	一六九、五九〇、二二二			九二、六八七、一

參 考

豫 算 年 度
 獨、曆ニ同シ
 露、同前
 澳、同前
 伊、七月一日ヨリ翌年六月末日マテ
 日、四月一日ヨリ翌年三月末日マテ

戰時中に就き内容

列國海軍費統計

度	英國	米國	獨國	佛國
(明治卅六年)	三四八、二一〇、〇九四	二〇七、八一六、七一四	一〇一、六三六、一八四	一一六、五一三、九三四
(明治卅七年)	三五九、四二五、八八六	二三七、三八九、六一八	九八、七三三、二九〇	一一二、〇二九、三三八
(明治卅八年)	三二三、二七〇、四四四	二二三、一七八、二〇〇	一一〇、六四八、八七四	一一一、四八〇、三五四
(明治卅九年)	三〇六、八九〇、八一八	二二六、三五九、二九〇	一一七、二八五、四二六	一一七、七二四、七〇八
(明治四十年)	二九八、八二七、四三六	二三八、四六三、二〇六	一三九、〇四二、〇七四	一一九、三一、一九〇
(明治四十一年)	三一五、一五四、〇〇四	二四六、二五七、四七四	一六二、一五三、八五二	一二二、三四二、一八八
(明治四十二年)	三四二、六八三、四五八	二七六、五九一、三五四	一九〇、八六五、四〇〇	一三八、七八九、二二二
(明治四十三年)	三九五、九三四、五七〇	二六五、四五六、八二二	二〇七、四七三、五一〇	一四三、六一九、八八〇
(明治四十四年)	四三二、八八〇、一四六	二五五、六三一、五三二	二一五、二五七、七四〇	一五九、四七四、一八四
(明治四十五年)	四三〇、四〇五、七六〇		二一四、九二七、三二二	一六三、八〇八、二〇八
露國		奧國	伊國	日本
(明治卅六年)	一一七、六三七、七一二	二〇、四三一、六三二	四八、六三四、一一〇	
(明治卅七年)	一一六、五八五、一五六	二〇、四二四、九四〇	五一、〇四五、六二〇	
(明治卅八年)	一二〇、四八四、二〇二	三七、二二六、六四〇	五〇、四二九、四七八	戰時中に就き内容不明
(明治卅九年)	一〇七、四六〇、一三六	二三、二九〇、〇七二	六〇、二〇一、七一〇	
(明治四十年)	九〇、五五九、〇一二	二六、六六七、六二〇	五三、七七四、〇四四	八二、四八二、二一九
(明治四十一年)	九八、一九〇、二八二	二三、二一四、〇七〇	六〇、五七一、二〇四	八〇、九六一、五九二
(明治四十二年)	九三、〇二〇、七一二	二五、七七四、七一六	六一、〇四四、九〇二	七二、一八九、二四五
(明治四十三年)	九四、四八八、六五〇	二七、一二三、六三二	七一、三〇二、七八二	七五、七二二、一二二
(明治四十四年)	一一三、六三四、九四〇	五〇、〇七八、五八二	七四、五九一、九〇〇	八六、八〇九、七三〇
(明治四十五年)	一六九、五九〇、二二二			九二、六八七、一八一

參考

豫算年

- 英、四月一日ヨリ翌年三月末日マテ
- 米、七月一日ヨリ翌年六月末日マテ
- 獨、曆ニ同シ
- 露、同前
- 奧、同前
- 伊、七月一日ヨリ翌年六月末日マテ
- 日、四月一日ヨリ翌年三月末日マテ

各國海軍軍人海陸勤務比較一覽

(某所調査)

國別	勤務別		士官以上		准士官		下士官		卒		計	
	員數	百分比	員數	百分比	員數	百分比	員數	百分比	員數	百分比	員數	百分比
日	海上	二、五六一	七〇	三〇、〇五〇	八二二	七〇	三三〇、〇五〇	七五	三三三、四三三	七五	三三三、四三三	七五
日	陸上	一、〇九三	三〇	三五八	三〇	一〇、〇六九	二五	一一、五二〇	二五	一一、五二〇	二五	
日	計	三、六五四	一〇〇	一、一八〇	一〇〇	四〇、一一九	一〇〇	四四、九五三	一〇〇	四四、九五三	一〇〇	
英	海上	三、九五四	六九	一、四二八	六五	八四、三六六	六九	八九、七四八	七〇	八九、七四八	七〇	
英	陸上	一、七六六	三一	七八二	三五	三七、三七五	三一	三九、九二三	三〇	三九、九二三	三〇	
英	計	五、七二〇	一〇〇	二、二一〇	一〇〇	一二一、七四一	一〇〇	一二九、六七一	一〇〇	一二九、六七一	一〇〇	
米	海上	一、五九五	四九	准士官は士官以上の中に混入されあり	三九	三七、八〇〇	六六	三九、三九五	六五	三九、三九五	六五	
米	陸上	一、六七九	五一	り	一九、二六六	三四	二〇、九四五	三五	二〇、九四五	三五		
米	計	三、二七四	一〇〇		五七、〇六六	一〇〇	六〇、三四〇	一〇〇	六〇、三四〇	一〇〇		
獨	海上	一、九九一	五四	一、三二六	五二	三二、四四四	六六	三五、七六一	六五	三五、七六一	六五	
獨	陸上	一、六八四	四六	一、二一九	四八	一六、四四九	三四	一九、三五二	三五	一九、三五二	三五	
獨	計	三、六七五	一〇〇	二、五四五	一〇〇	四八、八九三	一〇〇	五五、一一三	一〇〇	五五、一一三	一〇〇	
佛	海上	一、三六七	四一	准士官は下士卒中に包含せられあり	三七、一六二	七〇	三八、五二九	六八	三八、五二九	六八		
佛	陸上	一、九三三	五九		一六、〇四三	三〇	一七、九七六	三二	一七、九七六	三二		
佛	計	三、三〇〇	一〇〇		五三、二〇五	一〇〇	五六、五〇五	一〇〇	五六、五〇五	一〇〇		
露	海上	一、五九〇	五二	准士官は下士卒中に包含せられあり	三四、五八六	七三	三六、一七六	七二	三六、一七六	七二		
露	陸上	一、四五九	四八		一二、六二七	二七	一四、〇八六	二八	一四、〇八六	二八		
露	計	三、〇四九	一〇〇		四七、二一三	一〇〇	五〇、二六二	一〇〇	五〇、二六二	一〇〇		
伊	海上	八三六	四三	准士官の制なし	二一、四九二	七五	二二、三二八	七三	二二、三二八	七三		
伊	陸上	一、一二四	五七		七、〇〇八	二五	八、一三二	二七	八、一三二	二七		
伊	計	一、九六〇	一〇〇		二八、五〇〇	一〇〇	三〇、四六〇	一〇〇	三〇、四六〇	一〇〇		
澳	海上	七一一	五九		一四、二三五	七八	一五、五二二	七七	一五、五二二	七七		
澳	陸上	四九三	四一		四、一三一	二二	四、七四八	二三	四、七四八	二三		
澳	計	一、二〇四	一〇〇		一八、三六六	一〇〇	二〇、二七〇	一〇〇	二〇、二七〇	一〇〇		

各國に於ける甲鐵一噸の價格 (外國雜誌所載)

英	九百五十四圓	日	八百圓
米	九百卅六圓	獨	八百八十一圓
佛	千百廿六圓	露	千二百廿四圓
伊	九百五十四圓		

各國製艦價格 (一噸ニ付)

英	九百圓	戰艦	九百九十圓	巡洋艦	千圓
米	九百八十圓		千〇十圓		九百圓
獨	千廿圓		九百廿圓		七百七十圓
佛	千百七十圓		千〇廿圓		
露	千圓		八百四十圓		
伊	千百七十圓		千〇廿圓		七百九十圓
日	約千圓				

(各種艦共)

明治四十五年三月二十日印刷
明治四十五年三月二十三日發行
明治四十五年五月二十五日訂正再版

定價 上製金六拾錢
並製金五十錢
價 郵稅金六錢



著者 兼發行者 盛田 曉
東京府荏原郡大崎町下大崎百八十九番地

印刷人 山田 三郎
東京市芝區櫻川町十七番地
印刷所 山田活版所

東京府荏原郡大崎町下大崎百八十九番地

發行所 帝國海軍の危機發行所

319

271

267
813

明治四十七年五月二十二日
 明治四十七年五月二十三日
 明治四十七年五月二十日

安
 山
 山
 山

不
 不

山
 山
 山
 山

發行所

帝國書局の發行所

東京市丸の内區丸の内三丁目

終

